与那国町文化財調査報告書　第３集

島仲村跡遺跡

－島仲地区遺跡詳細分布調査に係る調査報告書－

与那国町教育委員会

2002年３月

序

今回報告します『島仲村跡遺跡』は、文化庁および沖縄県より補助を受け、平成11年度～平成13年度にかけて調査を実施しました島仲地区遺跡詳細分布調査の成果を報告するものであります。

島仲村跡遺跡は、15世紀に活躍した女傑サンアイ・イソバの生まれた村と伝えられており、その生家跡は町指定の文化財として、その保護を行っております。また、同遺跡内に残るウガンやトゥニなどは祭祀の対象となっており、聖なる地域でもあります。

現在、本町ではこの島仲村跡遺跡を含む一帯でほ場整備を予定しております。実施予定地のほとんどに島仲村跡遺跡が含まれており、また、町民の心のよりどころである聖域も所在することから、その適切な保存を図るために当教育委員会を主体として事前の遺跡範囲確認調査を実施することとなりました。

今回の調査では、サンアイ・イソバ当時の遺構はほとんど確認できず、多くの部分はこれまでの耕作や採石工事などで破壊されていましたが、一部では溝の跡と思われる部分を確認しました。また、遺物は中国や東南アジアの陶磁器といった海外の産物が多数得られており、当時の与那国島が広く世界に開かれていたことを彷彿とさせます。

町内ではこれまでに、約二千年前のトゥグル浜遺跡では南方の影響を受けたと思われる石器や、近世の与那原遺跡では焼けた柱の跡がみつかるなど、古の祖先の歴史と文化、生活をうかがい知ることができつつあります。

本町は日本最西端の島であり、かつ、南方世界に最も近い島でもあります。そのため、日本文化の多様性を考えるためにも重要な地域であると思われます。今回の報告が今後の考古学や歴史研究、また、地域住民の方々への歴史教育の一助となれば幸いであります。

今回の事業実施にあたっては、沖縄県教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センターからの指導のもとすすめてまいりました。また、現地調査にあたっては本町建設課を通じて地権者の方々から調査へのご協力を頂いております。そして、現地調査、資料整理に参加いただいた方々のご努力により円滑に調査を実施することができました。ご指導、ご協力いただいた方々へ厚く感謝申し上げます。

平成14年３月

与那国町教育委員会
教育長　　山田　ヤス

巻頭図版１　遺跡遠景

アラガウガン

サンアイ・イソバ生誕地

サンアイ・イソバ生誕地内の石だらい

巻頭図版２　地区内の拝所

TP15　溝状遺構

TP3　溝状遺構(遠景)

TP3　溝状遺構(近景)

巻頭図版３　溝状遺構検出状況

目　次

序
例　言
報告書抄
巻頭図版

第１章　調査に至る経緯および経過……1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の実施体制……1
第３節　調査の実施経過……2

第２節　環境と調査・研究史……4
第１節　自然環境……4
第２節　歴史環境……4
第３節　調査・研究史……6

第３章　調査の成果……10
第１節　調査の実施方法……10
第２節　地区内の層序……10
第３節　地区内の遺構……13
第４節　出土遺物……14
1　溝状遺構および同試掘坑内……14
A　青磁……14
B　白磁……14
C　染付……17
D　中国産褐釉陶器……17
E　タイ産褐釉陶器……17
F　土器……17
G　石器……18
H　脊椎動物遺体……18

2　表採およびその他の試掘坑……19
A　青磁……19
B　白磁……19
C　染付……19
D　瑠璃釉……20
E　緑釉陶器……20
F　中国産褐釉陶器……20
G　タイ産褐釉陶器……20
H　中国産色絵……20
I　本土産磁器……20
J　沖縄産陶器……20
K　土器……20
L　キセル……20
M　石器……20
N　貝類遺体……20

第４章　総括……29

挿図目次

第１図　与那国町の位置と地質……5
第２図　島内の遺跡およびウガン……8
第３図　島仲地区内の試掘調査箇所……11
第４図　2916番地ほかの試掘箇所……15
第５図　TP3遺物包含層検出状況……15
第６図　出土遺物（１）……21
第７図　出土遺物（２）……22
第８図　出土遺物（３）……23
第９図　出土遺物（４）……24
第10図　出土遺物（５）……25
第11図　出土遺物（６）……26

図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景
巻頭図版２　地区内のウガン
巻頭図版３　溝状遺構検出状況
図版１　出土遺物（１）……19
図版２　調査状況（１）……33
図版３　調査状況（２）……34
図版４　出土遺物（２）……35
図版５　出土遺物（３）……36
図版６　出土遺物（４）……37
図版７　出土遺物（５）……38
図版８　出土遺物（６）……39
図版９　出土遺物（７）……40

表目次

第１表　近世の与那国島における村の変遷……9
第２表　与那国島の遺跡編年……9
第３表　地区内採集・出土遺物集計……16
第４表　採集・出土土器集計……18
第５表　出土遺物観察表（１）……27
第６表　出土遺物観察表（２）……28

引用・参考文献……30

第１章　　調査に至る経緯および経過

第１節　調査に至る経緯

現在、本町では土地改良計画を順次すすめており、計画地の一つである島仲地区には「島仲村跡遺跡」が所在する。同遺跡地内は島仲地区（地区面積73.4ha）と、野底地区（地区面積67.6ha）の２地区をほ場整備事業として計画を立てている。

その島仲村跡遺跡においてほ場整備事業が計画されているが、同遺跡の他にも、複数のウガンやトゥニ、古墓が所在しており、古集落の痕跡が残っていることが考えられた。そのため、文化財保護の観点から遺跡の保存状況と今後の保護、活用を図ることを目的として、事前の遺跡範囲の確認調査として遺跡詳細分布調査を実施した。

今回の調査は文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会および沖縄県立埋蔵文化財センターからの指導を得、本町教育委員会が主体となって平成11年度～平成13年度の３ヶ年にわたり実施した。

第２節　調査の実施体制

本町では埋蔵文化財専門職員を配置していないため、沖縄県教育庁文化課および沖縄県立埋蔵文化財センター専門職員の指導により試掘調査をすすめた。また、現地での試掘作業員および資料整理作業員は賃金職員を雇用して行い、試掘箇所の選定、地主との調整に当たっては町建設課へ依頼した。

調査は与那国町教育委員会を主体として以下の体制で実施した。

事業主体

与那国町教育委員会

調査事務

与那国町教育委員会	教育長	長濱　一男（平成11年度）
〃	〃	山田　ヤス（平成12～平成13年度）
〃	総務課課長	東小浜功尚（平成11～平成12年度）
〃	〃	杉本　和章（平成13年度）
〃	教育課課長	宮良純一郎（平成11～平成12年度）
〃	〃	富村　龍男（平成13年度）
〃	社会指導主事	東濵　安伸（平成11～平成12年度）
	〃	松田　晃源（平成13年度）

調査担当

沖縄県教育庁文化課	指導主事	西銘　　章（平成11年度）
〃	〃	泊　　清（平成11年度）
〃	専門員	幸喜　　新（平成11年度）
〃	〃	田里　一寿（平成11年度）
〃	〃	仲座　久宜（平成13年度）
〃	嘱託職員	大島　　誠（平成11年度）
〃	〃	前田　一舟（平成11年度）
沖縄県立埋蔵文化財センター	指導主事	西銘　　章（平成12～平成13年度）

〃	専門員	片桐千亜紀（平成12年度）
〃	嘱託職員	田里　一寿（平成12年度）
〃	〃	天久　朝海（平成12年度）
	〃	片桐千亜紀（平成13年度）

調査調整

与那国町建設課	長濵　利典（平成11～平成12年度）
〃	東大島　侃（平成13年度）

調査指導

(財)沖縄県文化振興会史料編集室　室長	安里　嗣淳（平成11年度）

調査作業員

上里洋子、浦崎肇、大屋好伸、大屋正子、大屋爲良、川満豊子、崎元恒男、玉城キクエ、後神村晴晃、福仲マツ子、平井聡子、目差暉弘、目差イチ子、米倉実栄、上間曜、知念政樹、郭嘉琳、比嘉尚樹、宮城智宏

資料整理作業員

赤嶺雅子、上原大歩、神谷厚彦、北川幸子、知念めぐみ、西蔵盛史子、久山優子、外間守重

第３節　調査の実施経過

調査は平成11年度～平成13年度の３ヶ年間で実施した。現在、調査地は耕作地や牧場として利用されていることから、耕作地はサトウキビの植え付け前の８～９月と刈り取り後の２～３月にかけて実施した。

調査の実施経過を年度ごとに記す。

－平成11年度－

本年度は平成11年９月に事前調整を実施し、12月に若干調査を行った。本格的な調査はサトウキビ刈り取り後の平成12年３月１日～３月29日にかけて試掘調査を開始した。

調査は地区の北側サンアイ・イソバの生誕地跡周辺を中心にして行った。調査はンマナガツイヌトゥニ付近で、任意に基準杭を２点設定し№.１・２とした。これを基準として、南北を1・2・3…、東西をA・B・C…として20m四方の大グリッドを設定し、さらにそのグリッド内に２m四方の小グリッドを設けて試掘調査を実施した。

調査は基本的には手掘りにより実施し、地山まで確認を行った。確認後はセクション図を作成し、重機により埋め戻しを行った。また、資料整理を順次行った。

－平成12年度－

本年度は９月に事前調整を実施し、若干の調査を行った。

本格的な調査は12月と２～３月にかけて実施した。今年度は重機を併用した調査を行ったことから、広範囲での調査を実施することができた。調査対象地は耕作前後の畑のみとした。

調査の迅速化を図るため、前年度に行ったグリッド方式による試掘坑の設定法を改め、畑の大きさや遺物の散布状況に応じて10～30mピッチで試掘坑を設けて確認を行った。

うち、2916番地ほか（アラガウガン北側）で遺物包含層を確認したため、この地点は手掘りによる調査に切り替えて、平成13年３月13日～３月16日にかけて詳細な調査を行った。

また、遺物洗浄や図面整理等の資料整理を随時すすめた。

－平成13年度－

調査の最終年度である。これまでは地区西側の調査が中心となっていたため、本年度は東側での調査を行った。調査は平成13年10月９日～10月26日の間の２週間に、牧場内での踏査及び試掘、さらに田原川上流においても踏査を行った。

そして、資料整理をすすめ報告書を刊行し、事業を完了した。

第２章　環境と調査・研究史

第１節　自然環境

本遺跡の所在する与那国島は日本最西端の島として知られ、年に数度、遙か洋上に台湾を望むことができる。面積は約28.88㎢で東西に長い六角形を呈し、島の周囲には急峻な崖が巡っている。島の分類では高島に属し、231.2mの宇良部岳を最高峰として100～200m級の山々が東西に連なっている。平地は集落のある部分に沖積層が形成され、島仲村跡遺跡一帯は起伏のある台地状をなしている。

島の地質は砂岩などからなる八重山層群を基盤として、サンニヌ台ではその露頭がみられる。そして、島の北側では八重山層群の上位に石灰岩からなる琉球層群が覆っており、両者の露頭を確認できるのがティンダバナで、県指定の名勝となっている。

トゥグル浜遺跡の調査ではイノシシ骨が出土しており、先史時代にイノシシが生息していた可能性はあるものの、現在は中型の哺乳類は生息していない。また、県指定天然記念物のヨナグニサンをはじめ、特徴的な生物が生息している。

植物相は複雑で、宇良部岳一帯にはウラジロガシ、久部良岳一帯にはイタジイの林が形成され、海岸にはアダンなどからなる海岸林が形成されている。そして、ヨナグニトキホコリなどの固有植物が自生している。

このように特徴的な風土を残す与那国町では、久部良岳一帯が天然保護区域として保護されており、今後とも文化財、天然記念物の適切な保存、活用が望まれる。

島仲村跡遺跡一帯は標高約70m前後で、北から南へ向けて緩やかに傾斜している。ほとんどが耕作地として利用され、東側には牧場が拓かれている。また、地下は石灰岩であることから10数年前まで採石が行われ、採石跡を埋め立てた部分もあった。現在は廃村となったが、明治までは島仲村跡が所在し、祭祀が続けられている。

第２節　歴史環境

町内に所在する先史時代に属する遺跡はトゥグル浜遺跡の１ヶ所のみで、他は近世の村跡が中心である。

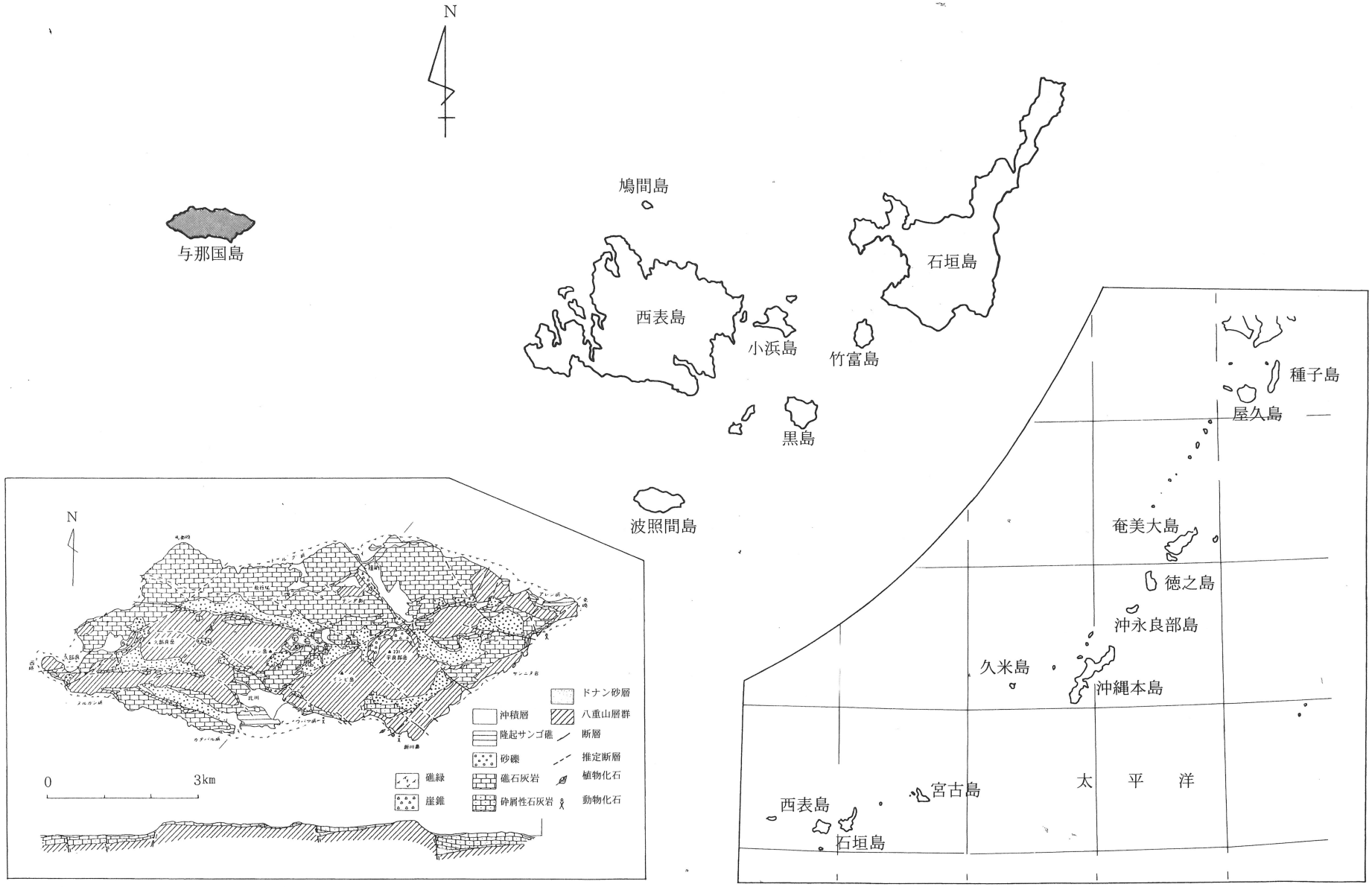
トゥグル浜遺跡は安里編年の前期に位置づけられ、土器を伴わない「無土器」の遺跡である。この時期の特徴として南方に起源をもつとされる局部磨製石斧があり、トゥグル浜遺跡からも多く出土している。上述のとおり与那国島の先史遺跡は１ヶ所であるため、文化的な様相は判然としない。また、大泊浜貝塚では以前の分布調査で自然遺物を含む包含層が確認され、無土器の可能性が考えられている。

トゥグル浜遺跡以降の与那国島は空白の時代となる。次いで現れるのは与那原遺跡などが形成される14～16世紀頃である。

この時期には漂流で流れ着いた朝鮮人たちの記録があり、往事の生活の様子をうかがうことができる。『李朝実録』「成宗実録」巻一〇五の項をまとめると、次のように記されている。

①陶磁器はなく、土器を用いている。
②稲作をしており、牛耕を行っている。
③家は一室からなり、茅葺きである。
④土葬は行わず崖葬を行う。
⑤牛や鶏、猫を飼っている。
⑥鍛冶を行っている。

以上のうちいくつかの点は『与那原遺跡』の報告において、調査成果とともに検討されている。



第１図　与那国島の位置と地質（坂井1985）

現在の集落は沖積平野に形成されるが、いずれの古集落とも台地上に立地し、現在の集落からの距離は離れている。そして、伝承ではドナンバル村などの古集落があったとされ、島仲村もそのひとつとされている。1647年作成の『宮古八重山両島絵図帳』には「そない村」、「島中村」、「長嶺村」、「ひけ川村」の中の１つにあげられ（沖縄県教委1993)、明治期の絵図では当時の島仲村の屋敷配置をうかがい知ることができる（沖縄県教委1990)。島仲村は1918年に台地上から海岸部へ移住している。また、近世に所在した村跡（遺跡）の変遷は第１・２表のように考えられている（与那国町教委1988、知念1989)。

島仲村跡遺跡内には、アラガウガンをはじめとするウガン、ンマナガマイヌトゥニなどのトゥニ、ヌッカなどのビディリなどが８ヶ所所在する聖域であり、現在でも祭祀が続けられている。特にンマナガマイヌトゥニ一帯には旧集落の石積みや井戸などが良好な状態で遺存している。

第３節　調査・研究史

町内では平成13年度現在で18ヶ所の周知の遺跡が確認されており[1]、このうち試掘・発掘調査が行われたのは、トゥグル浜遺跡などの７ヶ所である（第２図)。

与那国島で調査が行われたのは、笹森儀助が記した紀行（笹森1895）の中で大和墓が取り上げられ、その際に採集した人骨の研究が足立によって行われている[2]。

その後、町内での調査は滞るが、1959年には高宮廣衛によって遺跡分布調査が実施され、この調査で島仲村跡遺跡（原文では「旧仲部落跡」）が確認されている（多和田1960)。

66年には永井昌文らが、大和墓や樽舞崖葬墓、祖納集落を流れる田原川沿い（島仲橋遺跡か）で試掘調査を行っている（永井・佐野1966)。この調査では多くの人骨が得られ、特に田原川沿いのものは層位から考えて先史時代のものではないかとしている。また、樽舞崖葬墓ではヤコウガイ製匙が１点出土している[3]。

71年には沖縄大学学生文化協会により分布調査が行われ慶田崎遺跡などが確認された（沖縄大学学生文化協会1971)。そして、79～80年にかけて沖縄県教委により竹富町・与那国町内の分布調査が行われ、与那国町では16ヶ所の遺跡を報告している（沖縄県教委1980)。県教委の調査では島仲村跡遺跡から包含層を確認している。

与那国島での本格的な発掘調査が実施されたのは、82～84年にかけて行われた青山学院大学による与那原遺跡の調査である。

次いで、83年には沖縄県教委により与那国空港拡張に伴うトゥグル浜遺跡の発掘調査が実施された（沖縄県教委1985)。明確な遺構は確認されなかったが、わずかに柱穴と思われる部分を確認している。遺物は石器が主体で特に石斧が卓越する。石斧は局部磨製石斧が多く、東南アジアの系譜を引くものとされる。獣骨ではイノシシがもっとも多く、以前は生息していたか、あるいは他地域からの持ち込みではないかとしている。特筆すべき遺物としては有孔サメ歯製品があり、先島地域では初の出土例であった。

85年には、町教委により久部良小学校体育館建設に係る慶田崎遺跡の調査が行われた（与那国町教委1986)。調査区のほとんどが基盤まで攪乱を受けていたため遺構は確認できなかったが、14～16世紀にかけての陶磁器が出土した。遺物は褐釉陶器を主体に、青磁や土器などが出土した。白磁はいわゆる「ビロースクタイプ」を含んでいる。特筆すべき遺物として、用途不明の円盤状土製品がある。

86・87年にかけて、町教委により畑地改良等に係る与那原遺跡の調査が行われた（与那国町教委1988)。遺構はピット（柱穴)、土壙、排水溝が確認されている。土壙は12基確認され、板状の石を伴うことから礎石をもつ建物に伴うものではないかとされる。また、木柱を伴うものがあった。遺物は土器を主体としている。褐釉陶器は大型資料があり、龍文を施すタイプが得られている。青磁は碗を主体として器種が豊富であるが、これに対して白磁は出土量が少ない。特筆すべき遺物として、フイゴの羽口と鉄滓が出土している。

88年には沖縄県立博物館により分布調査が行われ、島仲村跡遺跡では遺物がブロック状に点在することを確認

している（知念1989）。

97年に県教委により与那国空港整備に係る分布調査が実施された（沖縄県教委2000）。整備予定地内にはトゥグル浜遺跡、サンバル村跡遺跡[4]が所在し、前者で試掘調査を実施したが明確な遺物包含層は確認できなかった。そしてダンノ浜、桃原遺跡を新たに確認し、前者において試掘調査を実施した。ダンノ浜での試掘では近代のものと思われる石組み炉と焼土面を確認し、遺物の出土状況から貝処理の施設ではないかとされる。

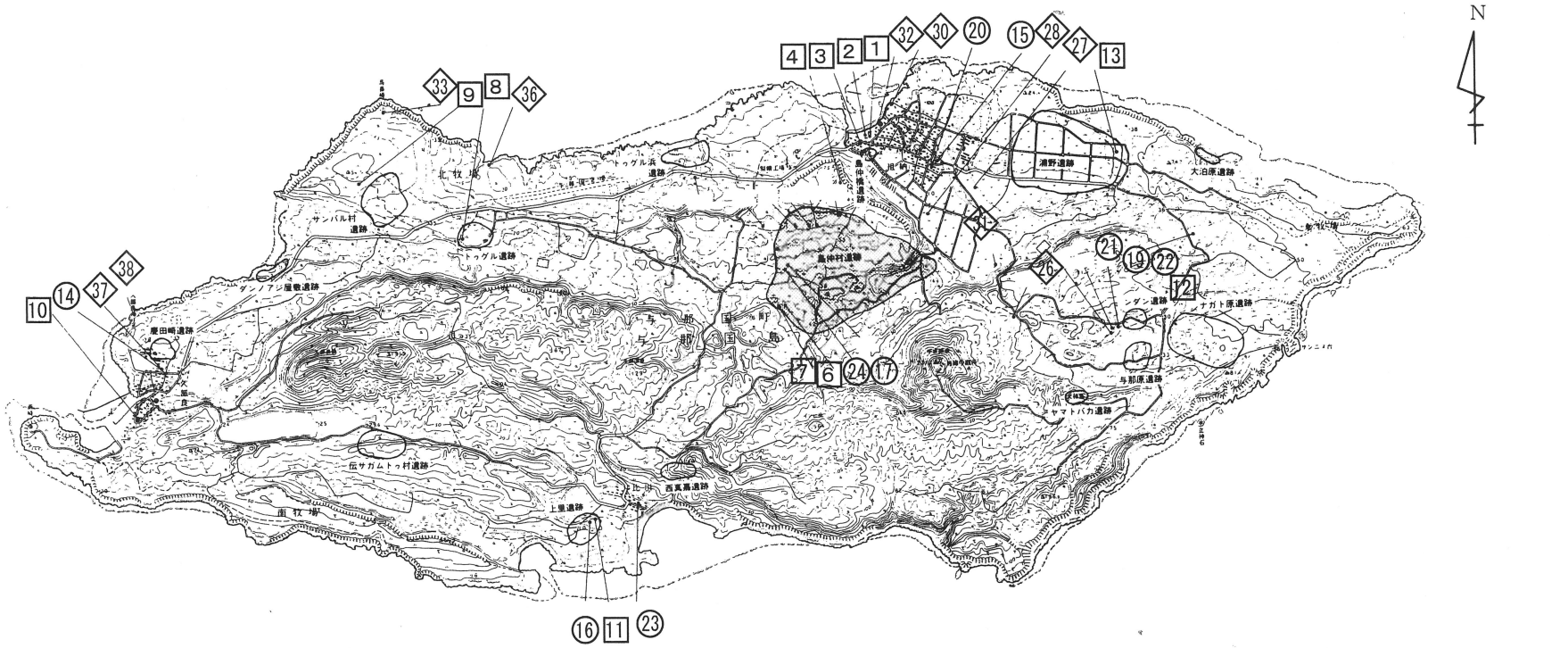
＜注事項＞

1）遺跡数は大和墓を含む。島内には各所に古墓があり、将来的には調査が必要と思われる。

2）大和墓は「ダマトゥ・ハガ」と称する。以前は墓内に刀剣や鞍などがあったことから、笹森はここが平家の落武者の墓であるとし、人口に膾炙するようになった。これに対して池間栄三は、遺物が近代に属する思われること、地名は「ダマ＝山」、「トウ＝山奥」、「ハガ＝境界」と解釈できることから、平家とは無関係とした（池間1959）。

3）近年、ヤコウガイ製匙が墓に伴う例の確認例が増加している（城間ほか2001）。ヤコウガイ製匙は沖縄諸島における沖縄編年後期に大型の製品が出土し、グスク時代には小型化する（上原1986）。銅製品は近世においては儀礼に関わるものとされ（木下1981）注目される遺物である。

4）別件でサンバル村跡遺跡内に所在する拝所の確認を行った。結果、町教委で作成した文化財地図に記載されていない拝所２ヶ所を確認した。１ヶ所は現在でも祭祀が行われているが、もう１ヶ所はそのような形跡はみられなかった。



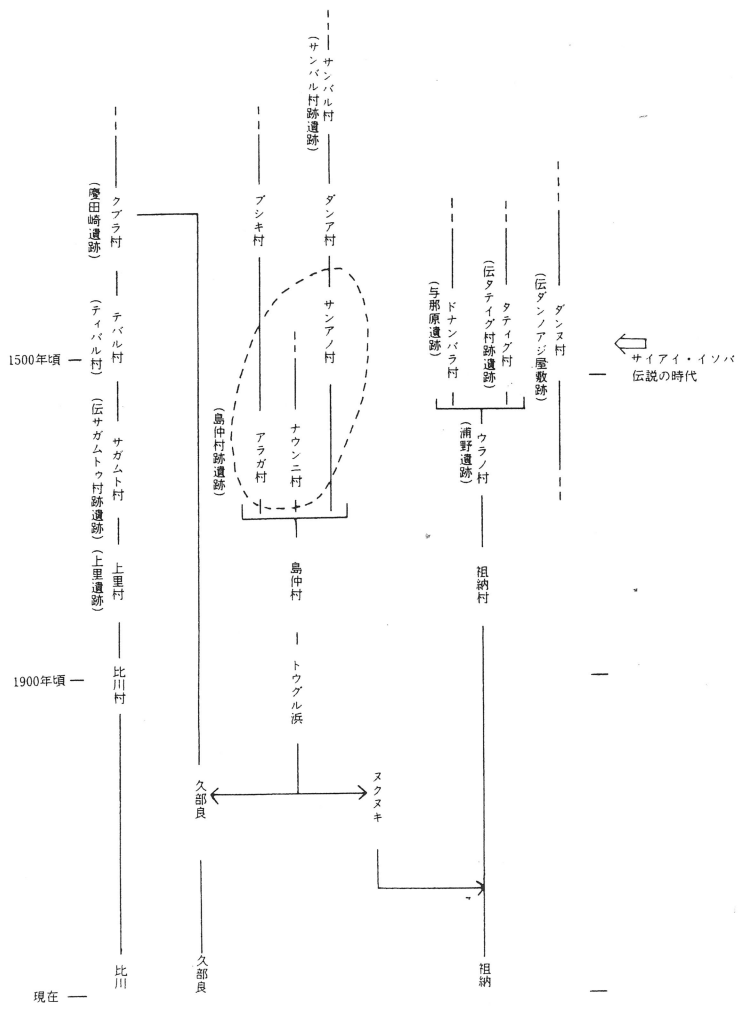
〈凡例〉

1．□数字はウガン（御嶽）、○数字はトゥニ、◇数字はビディリを表す。

ウガン（御嶽）	トゥニ	ビディリ
1 トゥヤマウガン	14 クブラマチリトゥニ	26 ハイナグ
2 ティウガン	15 ウラマチリトゥニ	27 ティラクンダ
3 トゥマイウガン	16 ンディマチリトゥニ	28 アガイハマティ
4 ヌックウガン	17 ンマナガマイヌトゥニ	29 ヌッカ
5 ウヤバルウガン	18 ンマナガツイヌトゥニ	30 ナンタ
6 アラガウガン	19 ンダンマチリトゥニ	31 クンマ
7 ナウンニウガン	20 大俣家のトゥニ	32 ナンタハマ
8 トゥグルウガン	21 与那原家のトゥニ	33 ンマバナ
9 ディティグウガン	22 祖納家のトゥニ	34 ンマナガ
10 クブラウガン	23 後間家のトゥニ	35 ムムタバル
11 ンディウガン	24 友利家のトゥニ	36 フランダ
12 ンダンガン	25 島中家のトゥニ	37 クブラビディリ
13 ウラヌウガン		38 グブラバリ

0　1,500m

第２図　島内の遺跡およびウガン（知念1989）



第１表　近世の与那国島における村の変遷　（与那国町教委1988）

遺　跡　名	12C	13C	14C	15C	16C	17C
トウグル浜遺跡	━━					
慶田崎遺跡				━━	━━	
与那原遺跡			━━	━━	━━	
島仲遺跡		┆┆	━━	━━	━━	┆┆┆┆
トゥグル遺跡					━━	━━
西真嘉遺跡				━━	━━	━━
上里遺跡					━━	━━
伝サガトゥ村遺跡						━━

第２表　与那国島の遺跡編年（知念1989）

第３章　調査の成果

第１節　調査の実施方法

調査経過に記したように、11年度はグリッドを設定して行い、12・13年度は任意に試掘坑を設けて行った。

平成11年度の調査方法は任意に基準点を設け、これを基本に20m四方の大グリッドを設定し、さらに２m四方の小グリッドを設けて試掘を行った。

平成12･13年度の調査方法は、任意に試掘坑を設ける形で行った。試掘坑の間隔は畑の大きさや遺物の分布状況から判断して、10～30m間隔で設けた。重機による粗掘りのあと、手掘りで清掃を行った。また、一部で包含層を確認したため、１週間程度の精査を行った。

試掘坑は第３図のとおり設け、200ヶ所余で試掘を行った。今回、遺物包含層が確認できたのは2916番地ほか３筆で設けた２ヶ所の試掘坑（TP３・15）のみであり、他の部分については耕作や採石により著しく攪乱を受けていた。また、今回設けた試掘坑内からの出土遺物は少なく、ほとんどが表採であった。

一部では採集遺物が集中する部分（第３図の網掛け部分）があり、これらの地区に関しては本来は包含層があった可能性が考えられる。

第２節　地区内の層序

先にも述べたが、今回の試掘調査では大半の試掘坑が耕作などによる攪乱を受けており、中には岩盤上面まで攪乱されている部分もみられた。

遺物が集中して採集できる地区は包含層が遺存していたと考えられるが、いずれも耕作による攪乱が著しい。今回は試掘調査による部分的な確認であるため、現時点でこれらの地域にどの程度まで包含層が残存するのかは、さらに詳細な調査が必要である。攪乱を受けた試掘坑が多いことから、本報告ではすべての試掘坑については触れず、いくつかの地域にまとめて報告する。

遺物包含層を確認したのは2916番地ほか３筆一帯のみであった。ここ以外の地区では、遺物が表採でき包含層が遺存していた可能性がある地区、遺物が全く採集できず包含層がない（自然堆積層もしくは隠滅）と思われる地区に分けられる。

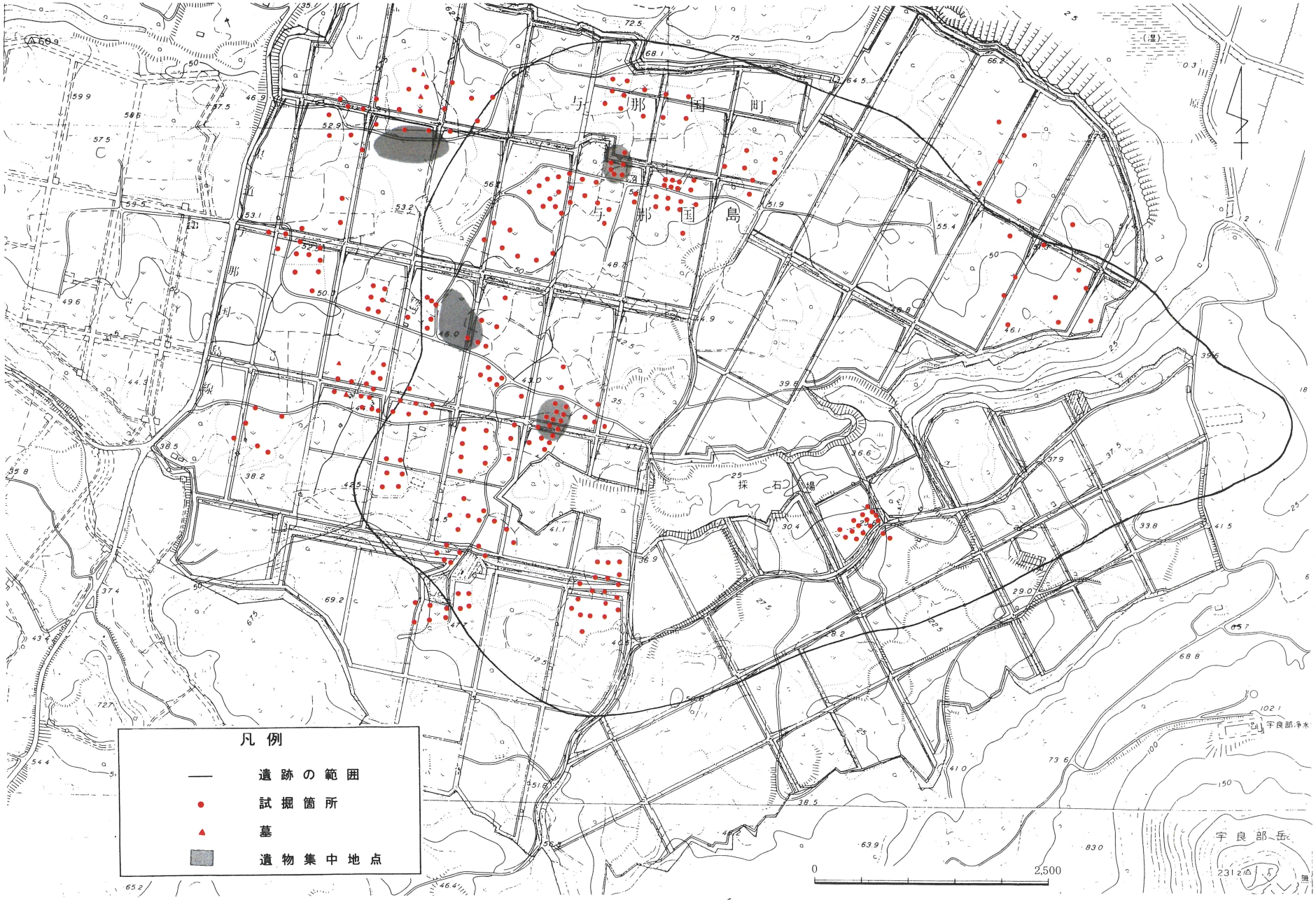
遺跡東側（町道久座線をはさむ東側）では、2217、2218・19番地で試掘調査を行ったが、いずれも包含層は確認できなかった。2217番地では自然堆積層のみで、表土から浅い位置で地山の赤土を確認した。2218・19番地では盛土層が厚く、旧表土および岩盤は深い位置から確認した。

同じ東側では牧場内（2308～20番地）で試掘調査を行ったが、表土は浅くすぐ岩盤に到達した試掘坑もあった。人工遺物は確認できなかったが、オオジャコが５点ほど出土した。オオジャコは島内では主に島仲村跡遺跡の東側から多く出土するようである。

試掘調査は遺跡西側（町道久座線と県道与那国線をはさんだ地域）を中心に行った。調査の結果、包含層が遺存していた可能性がある部分を確認した。

まず、サンアイ・イソバ生家跡付近では、2510番地（ンマナガマイントゥニの東側）で多く遺物が採集でき、トゥニ脇に設けた試掘坑からは薄い黒色土層を確認し、遺物包含層の可能性が考えられる。

2371～73番地（ンマナガマイントゥニの南側）では、B-1グリッドで沖縄産陶器が多く得られたが、耕作による攪乱が著しい。2354番地では自然堆積層のみで、遺物の採集はほとんどできなかった。この一帯に関しては包含層が存在する可能性は低い。



第３図　島仲地区内の試掘調査箇所

2544番地、2472～75・79番地一帯は遺物が多く採集できる。特に2473番地が多く採集できる。また、後述する2544番地では焼土と思われる部分を確認し、何らかの遺構の可能性が考えられる。

2549番地、2569番地、2561番地一帯では、遺物自然堆積層のみで遺物は採集できず、包含層が存在する可能性は低い。2420～22番地、2583～2585番地も同様である。

2897番地、2399番地の周辺では十数年ほど前まで採石が行われており、その後に埋め戻しを行い耕作を行っている。そのため、この一帯は隠滅したと考えてよいだろう。

2916～18・20番地では、多くの遺物が確認でき、遺構を確認した。この部分については後述する。

2407番地、2431～33・35・36番地では包含層を確認することはできなかったものの、遺物は比較的多く採集することができる。2431～33番地は耕作を行っていたため試掘調査はできなかったが、遺物が比較的集中して採集できることから包含層が遺存する可能性も考えられる。

2650・54番地では、遺物は採集できるが量は少なく、包含層もみられない。持ち込み、もしくは隠滅の可能性がある。2677・2683番地でもわずかに遺物を採集することができるが、同様と考えられる。

ナウンニウガン周辺の2907・8番地、2694～2697番地でも試掘調査を実施したが2697番地（ウガン南側）で炭が集中する部分を確認した。ただし、規模が小さいことから積極的に遺構と考えることはできない。ウガン内からは土器などが採集できた。その他の部分についてはほとんど遺物は得られていない。

第３節　地区内の遺構

度々述べているが、耕作による攪乱のため遺跡の保存状況は悪く、確認できた遺構は墓、溝状遺構、焼土集中部である。

１　古墓

墓は2544番地で２基、2668・70番地で２基の計４基を確認した（図版3-7）。航空写真でも畑の中に小島状に墓が残っているのが分かる。今回は位置のみを確認し、内部の調査や抜開による形態の調査は行っていない。また、確認はできなかったが、ここ以外にも小さな積石が複数点在しており、これらのうちいくつかは墓と考えられる。

墓は草木で覆われていることから形態は不明であるが、これまでの類例から考えると、ヌーヤ墓などとよばれる墓のような積石墓に含まれるものと思われる。同様な形態の墓は島内でも確認されている。

２　溝状遺構

2916番地ほか３筆の地点ではTP３・15の２ヶ所で溝状遺構を確認した。同遺構は地山を掘り窪め、内部に黒色土が堆積している。両試掘坑は約10m離れているが、方向が一致することから一連の遺構と思われる。遺構はほぼ東西に軸を持ち、西から東へゆるやかに傾斜している。

まず、TP15では幅50cm と狭いのに対して深さは20cm と深い。また、石灰岩礫が溝底面や縁辺に集中しており、土留めのような機能が考えられる（図版3-3・4）。

TP３では幅が80cm で、縁辺部で深さは５cm 程度であるが、中央部では30cm と深くなっている。遺構覆土からは褐釉陶器、土器を主体にして出土した。また、TP15と同じく石灰岩礫が集中しているが、底面に集中する点が異なっている（第４・５図）。

今回の調査では小規模な試掘坑での確認であったため詳細は不明であるが、傾斜するように設けられていることから排水路的な機能を持っていたと考えられる。

同様な遺構は本遺跡の東方約３km に所在する与那原遺跡（与那国町教委1988）から検出されている。与那原

遺跡では土地改良に伴う試掘調査であったため部分的な確認に止まったが、Ｊ・K-22・24で排水溝を確認した。同遺構は幅が180～270cm、深さが10～20cmで黒色土が堆積していた。遺構は遺跡東端の低い場所にあたることから排水のための機能を持っていたとされる。また、遺物の出土はほとんどない点は今回と異なる。

同様な遺構は波照間島の下田原貝塚からも検出されている（沖縄県教委1986）。下田原貝塚で検出された遺構は第１地区カ-51～59グリッドで確認され、幅80cm、深さが５～15cm、全長は36m。西から東へ緩やかに傾斜しており、「排水的機能をもつ遺構」とされている。同貝塚のカーボン年代は3,600～3,700年前であり、直接結びつくものではないと思われる。

3　焼土・炭集中部

2455番地TP２では焼土集中部を２ヶ所確認した（図版3-6）。重機による試掘確認のみであるため性格などは不明だが、土坑状の落ち込み内に堅く締まった赤土の焼土を多量に含んでいた。また、共伴遺物がみられず時期は不明である。

また、2697番地のウガン南側では炭集中部を確認した。炭自体の堆積は薄く広がっており、積極的に遺構と捉えることは難しい。しかし、ウガン内および周辺では比較的遺物が多く得られていることから、さらに広い範囲での試掘が必要であろう。

第４節　出土遺物

今回の調査で得られた遺物の総数で1,499点で、大半は2916～18・20番地から得られたものである（第３表）。特に溝状遺構を検出したTP３・15合わせて765点が得られた。うち、TP３検出中には408点が得られ、出土状況から考えて遺構あるいは包含層に伴う遺物と考えられる。TP３・15内からは沖縄産陶器がまったく出土せず、遺構の時期を確定する上で重要である。

地区全体をとおして青磁、中国産褐釉陶器は広く得られているが、白磁、染付、タイ産褐釉陶器は少ない。また、土器、本土産磁器は一部の地域からまとまって得られる傾向がみられる。

遺物の採集方法は特徴的なもの（口縁部や底部）を優先したため、地区による採集量の多寡は必ずしも表面散布量を反映していない場合がある。

ここでは、まず、遺構内出土の遺物をあげ（遺構検出の試掘坑内を含む）、次いで表採およびその他の試掘坑で得られた遺物をあげる。

1　溝状遺構内および同試掘坑内

遺構内および遺構検出の試掘坑内からの遺物は、中国産褐釉陶器を主体として土器、青磁などが得られた。沖縄産陶器がみられないことは特筆され、TP３検出中の408点中193点が中国産褐釉陶器、168点が土器であった。なお、各々の遺物は第４表に詳述した。

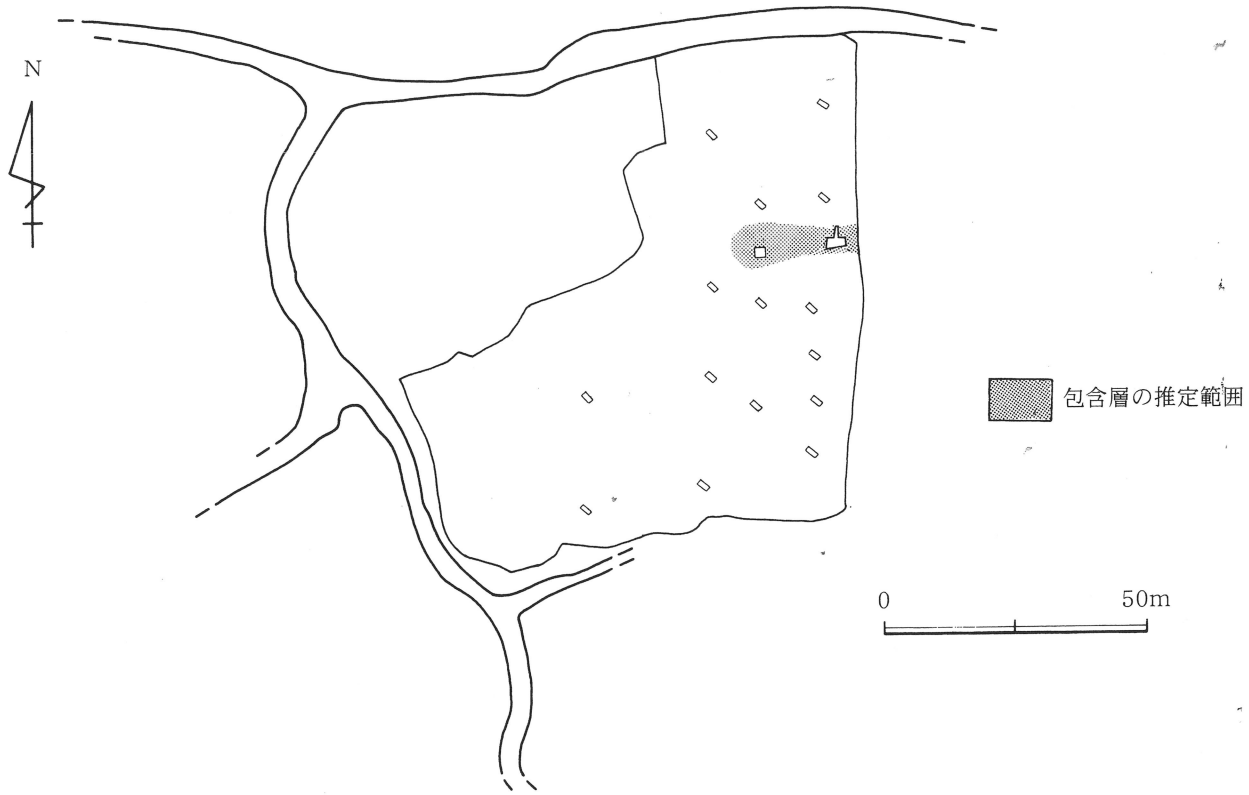
A　青磁

青磁は第６図１～12である。確認できる器種は碗がほとんどであり、わずかに小壺、水滴もしくは小型の水注が得られたのみである。

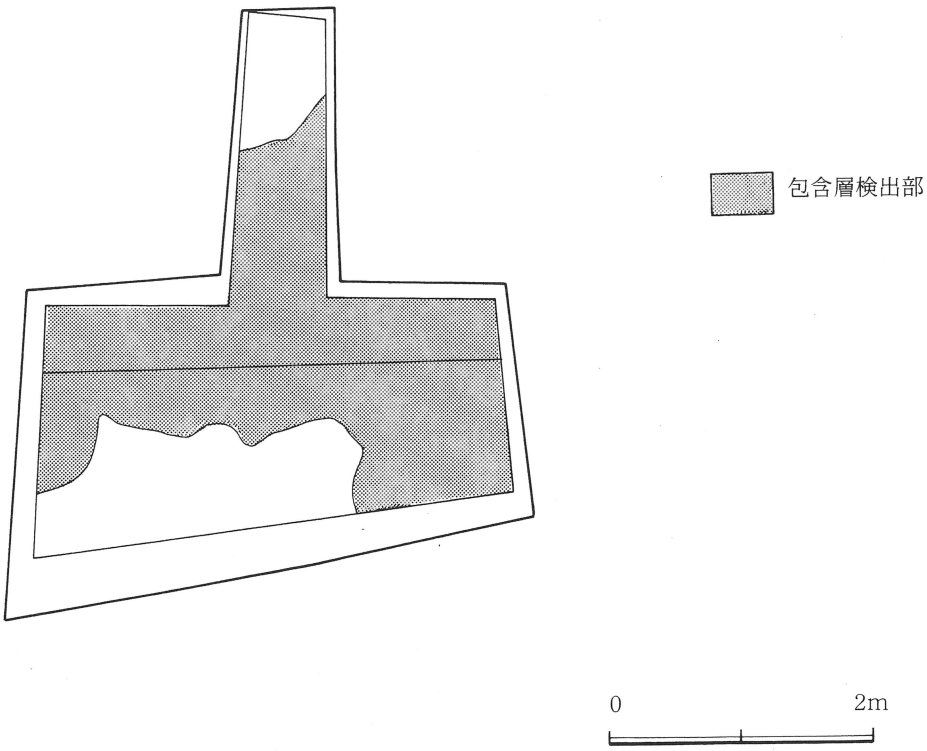
碗は同図１～10で、有文資料は連弁文、雷文帯などが確認できる。また、底部資料では印花文が確認できる。同図11は小壺、同図12は水滴もしくは水注は注ぎ口の付け根である。

B　白磁

白磁は10点のみと少ない。第６図13に輪花皿を示した。



第４図　2916番地ほかの試掘箇所



第５図　TP３遺物包含層検出状況

第３表　地区内採集・出土遺物集計

出土地＼遺物	青磁	白磁	染付	色絵	瑠璃釉	緑釉	中国産褐釉陶器	タイ産褐釉陶器	本土産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	土器	瓦	キセル	鉄製品	石器	合計
2354　J-7　表土	1																1
2354　R-6　表土							4						2				6
2354　S-6　表土							1										1
2354　T-8　表土		1					3				1						5
2354　U-5　表土											2						2
2354　表採	1																1
2360			2						1		1						4
2371　B-2　表土		1	3				1		3	7	33		1		1		50
2371　B-2　２層		3	2		1		2			5	1				1	1	16
2371　B-2	1																1
2371　B-3　表土		1	1				2		1	1	1						7
2372　N-10　表土		2	1				1			3	1	2					10
2372　N-10　0～30cm							2										2
2372　N-10　表土		1							1		2						4
2373　O-10　表土	2																2
2373　O-10　0～20cm		2					1					3					6
2373　O-10　20～50cm							1										1
2373　O-11　表土													1				1
2373　O-11　0～30cm		1							1								2
2373　P-10　表土		1															1
2373　P-10　0～25cm	1						2		1		1						5
2373　P-12　表土									2			2					4
2399	1	1															2
2407-1	6	1	2				1										10
2407-1、2436-1・2、2435　TP2		1					9				1						11
2407-1、2436-1・2、2435　TP1		2															2
2411～14		1	1	1					1	1	1						6
2429-3、2455	1		1						1								3
2437-1	2																2
2472～75・79	6								1							1	8
2510　J-8　表土		4	9	1					2	21	20		3				60
2510　J-8　２層			1						1	6	12						20
2510　J-9　No.1　表土		7	8				3		6		9	4					37
2510　J-9　No.2　表土			3						2	6	3		1				15
2510　K-7　表土											4				1		5
2510　K-8　表土		2	4				1		1	4	4	1					17
2510　表採			1						4								5
2522-1　ＴＰ６							1										1
2544	4	1					3										8
2583-1、2584　表土	3						2										5
2583-1、2584											1						1
2647-2　表採	2						1										3
2673　TP7	1																1
2675　TP4							1										1
2675　TP6											1						1
2675　TP9	1									1							2
2677	2																2
2692・93	1																1
2697-2　TP6	1											2					3
2907-9	1																1
2916～18・20　TP1	1						4					3					8
2916～18・20　TP2												3					3
2916～18・20　TP3　1層	3						37					58					98
2916～18・20　TP3　2層	7		1				67	1				24					100
2916～18・20　TP3	37	4	3				200	9				162				1	416
2916～18・20　TP5			4				1										5
2916～18・20　TP6	1							1									2
2916～18・20　TP10							1					1					2
2916～18・20　TP13						1	9					1					11
2916～18・20　TP15　2	16	4					103	5				144				2	274
2916～18・20　TP15	15	3	1				35	2				32			3		91
2916～18・20							3										3
2921												1					1
ナウンニウガン												100		1			101
不明	1						4	2				12					19
合　　計	119	44	48		1	1	506	20	29	55	99	555	8	1	6	5	1,499

C　染付

染付は４点のみで極めて少ない。碗と皿を第６図14・15に図示した。14は芭蕉文、15は桃あるいはザクロを描く。

D　中国産褐釉陶器

中国産の褐釉陶器は第７図１～９に示した。確認できた器種は壺が主体で、鉢がわずかにみられる。全形を伺うことのできる資料はなく小破片がほとんどである。

壺は同図１で、丸形の肥厚口縁をなす。同図２は丸形の口縁肥厚部をなし、きつく内彎する無頸の壺もしくは甕と考えられる。

同図３～６は底部で壺に含まれるものと思われる。３は底面からの立ち上がりが若干緩やかなタイプである。４～６は直に立ち上がるタイプで、６はほぼ直角に立ち上がる。

同図７・８は胴部である。類例から考えると壺に含まれるものと思われる。７は浮文を施す胴部片で、与那原遺跡（与那国町教委1988）と同様な龍文が展開するものと思われる。８は「吉」字のスタンプを施したもので、類例から考えると「大吉」と思われる。

同図９で鉢もしくは擂り鉢である。口縁部がＬ字状を呈する。同図10は茶入れ壺の底部である。底面には糸切痕が残っている。同図11は器種不明の資料で筒形を呈するが、釉の掛かり方をみると頸部ではないように思われる。

E　タイ産褐釉陶器

確認できた器種は壺のみで、全形を伺うことのできる資料はない。第７図12・13に図示した。中国産の褐釉陶器に比べ少ない。12は頸部、13は把手である。12はタイ産に含めたが中国産の可能性もある。

F　土器

土器は第８図に示した。出土量はもっとも多い。細片のみで全形をうかがうことのできる資料が少ないが、鍋、壺、碗形が確認できる。胎土を観察すると次の３タイプに分類できる。

Ⅰ類：砂質の胎土で、混和材に細鉱物粒を含む。

Ⅱ類：泥質の胎土で、混和材に白色の鉱物粒（石灰？）を含む。器面はポーラス。

Ⅲ類：泥質の胎土で、混和材に粗めの貝殻片？を含む。Ⅱ類に比べ硬質。

量的にはⅠ類がⅡ類に比して若干多く、Ⅲ類はわずかである（第４表）。TP３においては１層でⅠ類が41点、Ⅱ類が15点、２層ではⅠ類が９点、Ⅱ類が13点である。点数自体は少ないが、この点から考えると、Ⅱ類が１層、２層とも出土量に変化はないが、Ⅰ類は２層から１層にかけて増加する傾向がみられ、Ⅰ類は比較的新しい時期の土器と考えることができる。ただし、TP15ではⅠ類・Ⅱ類が同様に１層で減少しており、上記の点は積極的に支持できるものではないが、何らかの参考として捉えられるだろう。

Ⅰ類は同図１・７である。小破片のみで、鉢もしくは鍋形と底部が確認できた。同図１は鉢もしくは鍋形と思われる資料で、口縁が弱く「く」の字に折れる。内外面に指頭痕が残る。７は内底面に指頭痕が残る。

Ⅱ類は同図２～６・８である。鍋形と壺形が確認できた。２・３は直口口縁をなし、４は弱く開く器形である。３は外耳を貼付する。４は小型の壺形で口縁が強く外反する。５は碗もしくは浅鉢形で、口唇部を舌状にする。８は底部でややきつく立ち上がる。

Ⅲ類は同図９である。底部から丸みを帯びて直に立ち上がる器形である。泥質の胎土であるが、Ⅱ類と比べて焼成は良好でかなり堅緻。器表面が亀裂状になっている。

第４表　採集・出土土器集計

出土地＼分類	Ⅰ類			Ⅱ類			Ⅲ類		合計
	口	胴	底	口	胴	底	胴	底	
2372　N-10　表土		2							2
2373　O-10　0～20cm		3							3
2373　P-12　表土		2							2
2510　J-9　No.1　表土		4							4
2510　K-8　表土		1							1
2697-2　TP6		2							2
2916～18・20　TP1		2					1		3
2916～18・20　TP2		2					1		3
2916～18・20　TP3　1層	1	40		2	14	1			58
2916～18・20　TP3　2層		9		3	11			1	24
2916～18・20　TP3	2	115		5	37	2	1		162
2916～18・20　TP10			1						1
2916～18・20　TP13		1							1
2916～18・20　TP15　2層	2	84	3	1	52	2			144
2916～18・20　TP15		25			7				32
2921					1				1
ナウンニウガン	1	93			6				100
不明		8			4				12
合　　計	6	393	4	11	132	5	3	1	555

＊網掛け部分は遺構検出の試掘坑である。

G　石器

石器は第９図で、凹石と砥石が得られた。石材はいずれも島内で産する砂岩である。

同図１は凹石である。いびつな方形をなし４つの面に敲打による凹面があり、うち１面は凹面が深く使用頻度が高い。砥石は同図２である。１面に溝状の窪みがあり、数も多いことから使用頻度が高いといえる。

両者ともに与那原遺跡（与那国町教委1988）に類例があり、与那国においては広く使用された石器と考えられる。

H　脊椎動物遺体

ウシの左上腕骨および歯が得られた。左上腕骨は「近位部～遠位端」で、TP3溝状遺構の底面から１点検出した（図版１）。歯は破片がほとんどであるが、「L、M１or２」をTP15の２層から１点検出した。

また、溝状遺構点面からウシもしくはウマの骨片を検出したが、一部が被熱により黒変している。

図版Ⅰ　出土遺物（1）

2　表採及びその他の試掘坑

表採及びその他の試掘坑出土の遺物はナウンニウガンから土器を100点採集し、2510番地J-8表土から58点（うち沖縄産陶器41点）出土した。また、2916～18・20番地を除くと2510番地からの出土が多い。しかし、その他からは10点以下の採集・出土がほとんどである。なお、各々の遺物は第５表に詳述した。

A　青磁

得られた器種は碗が主体で、わずかに皿、瓶などが得られた。第10図１～６に図示した。

碗は同図１で、底部である。外面に不明の文様、内底面に印花文を施す。同図２は稜花皿である。同図３は碗もしくは鉢で、口唇部は輪花にする。同図４は八角杯の口縁部で、内面に不明の文様を施す。同図５は瓶の胴部、同図６は香炉である。

B　白磁

白磁は碗、小杯が得られ、第10図７・８に図示した。同図７は底部で、ビロースクタイプに含まれるものと思われる。同図８は小杯で型作りによるものである。

C　染付

染付は第10図９～12で、碗、皿、小杯が確認できた。同図９は碗で、不明の文様がわずかに残っている。福建・広東系の染付である。同図10・11は皿である。10は大きめの皿と思われ、文様の展開は不明。11は口折をなし、絵付けは滲んでおり文様は不明。同図12は小杯で、高台脇に圏線、内底面に点描を施す。

D　瑠璃釉

瑠璃釉は2371番地B-3の２層から１点のみ出土した。型押し成形の小杯と思われるが、小破片であるため図等は省略した。

E　緑釉陶器

緑釉陶器が１点出土した。細片であるため器種は不明、図は省略した。2916～18･20番地TP13からの出土である。

F　中国産褐釉陶器

第11図１～３である。壺のみが確認できた。口縁部形態は、１は方形、２は丸形、３はＬ字状の肥厚口縁部である。

G　タイ産褐釉陶器

第11図４・５である。４は口縁肥厚部を三角形にするもので、ラッパ状に開く器形をなす。５は口縁肥厚部を丸形に形成するタイプである。

H　中国産色絵

第11図６・７で、碗と小杯が確認できた。いずれも絵付けが剥落しており文様は不明。

I　本土産磁器

本土産磁器は24点得られたが、ほとんどは近現代に属するものである。第11図８～12に肥前系磁器と思われるものを図示した。確認できる器種は、碗、瓶がある。

同図８～10は碗である。小破片であるため文様の展開は不明であるが、いずれも花文と思われる。同図11・12は瓶で、11は頸部、12は肩部である。いずれも網目文を施すが、前者は直線的、後者は曲線的である。

J　沖縄産陶器

沖縄産陶器は地区内の広い範囲から比較的多く得られたが、図等は省略した。

K　土器

土器のほとんどはナウンニウガンからの表面採集である。Ⅰ類が圧倒的で、わずかにⅡ類がみられる。その他の地区でもほとんどがⅠ類で、Ⅱ・Ⅲ類は皆無に近いといえる。器形をうかがうことのできる資料がないため図等は省略した。

L　キセル

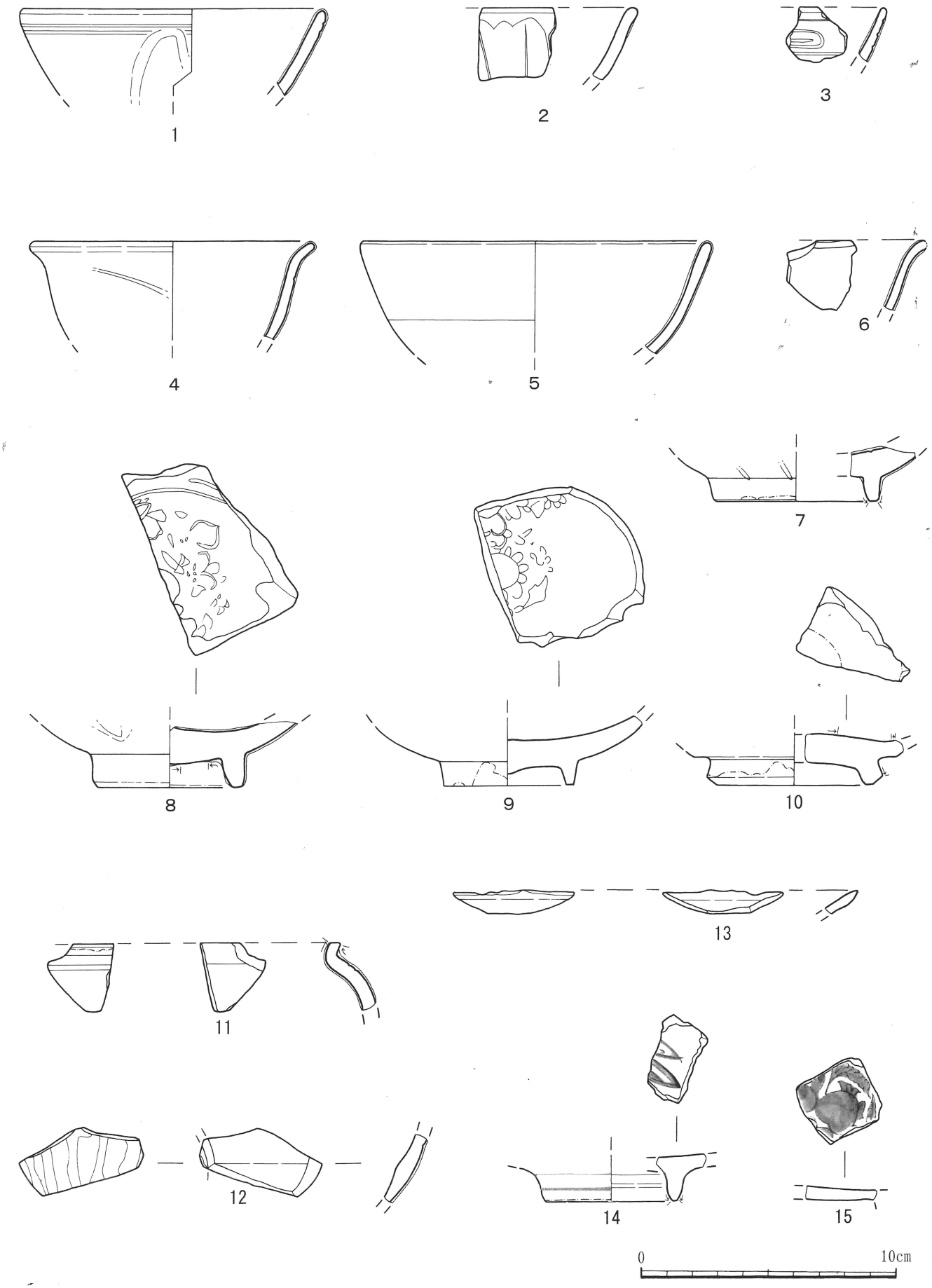
キセルは１点のみで、第11図13に図示した。陶製キセルの雁首で接続部が破損している。断面形は八角形をなす。ナウンニウガンからの採集である。

M　石器

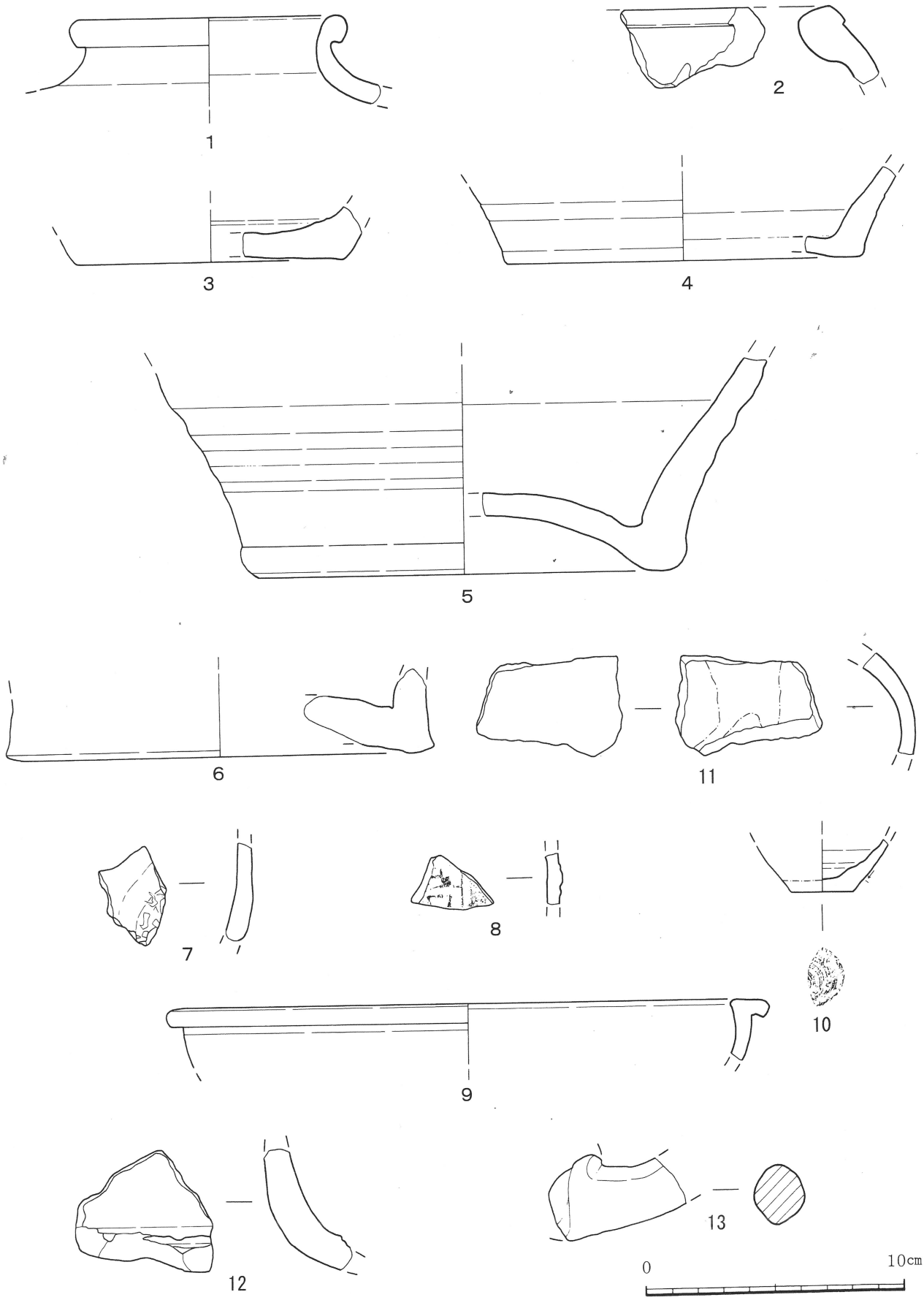
石器は第11図14に図示した。１面にわずかに磨面を有することから、砥石と思われる。砂岩を利用している。

N　貝類遺体

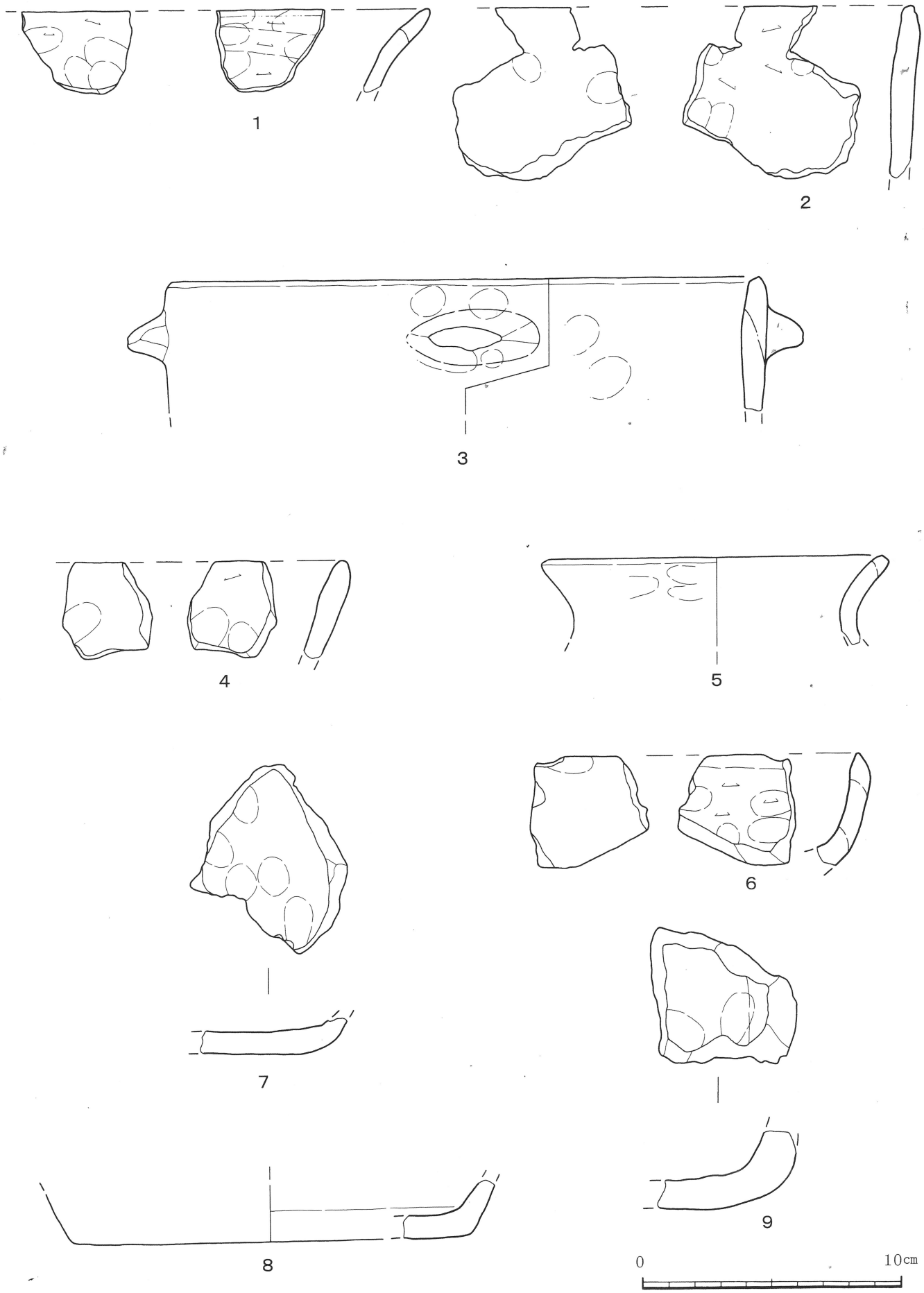
貝類は比較的少なく、2371番地B-2グリッド表土からシャコガイ、ヤコウガイ片などが10数点ほど得られている。詳細については割愛する。



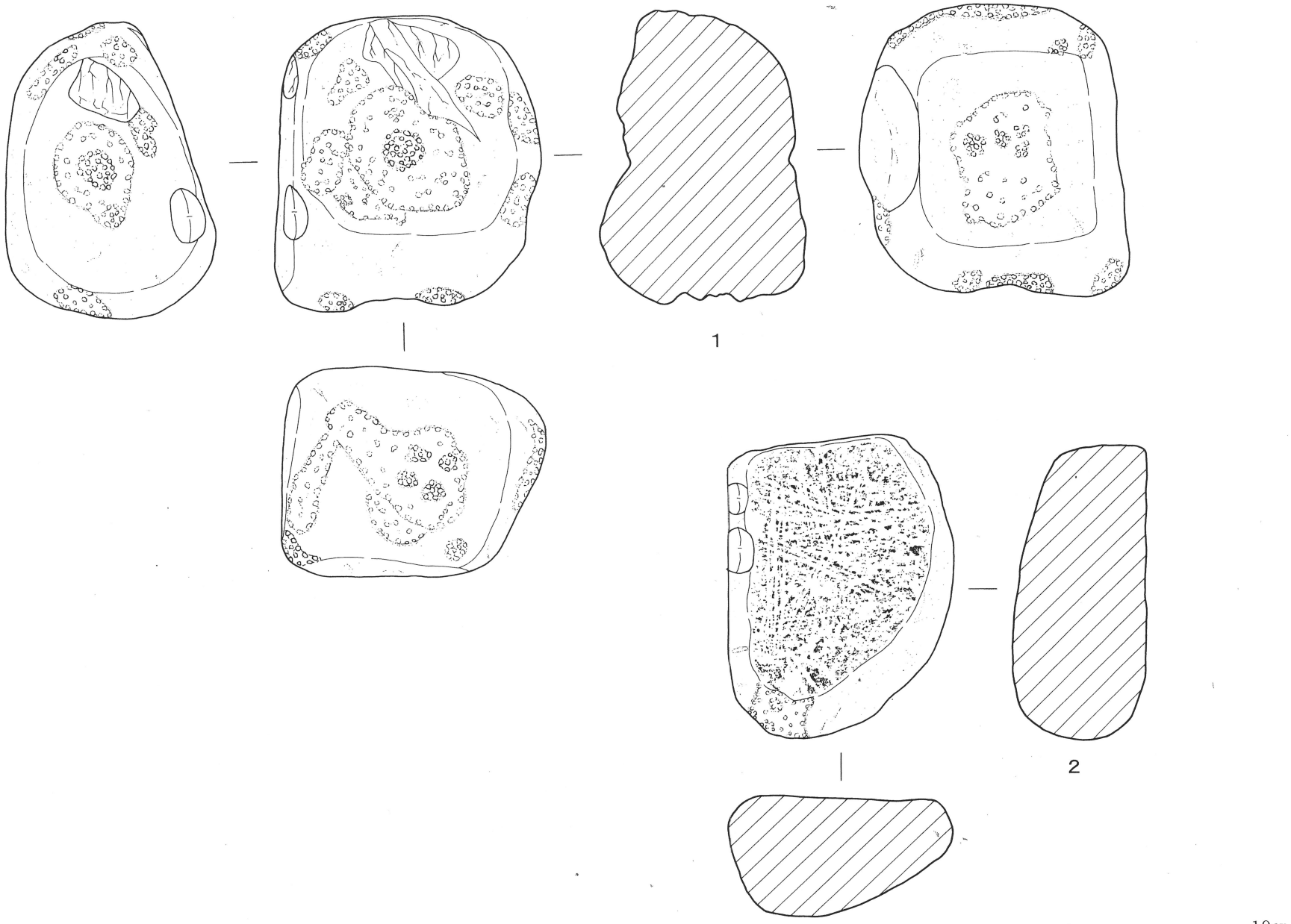
第６図　出土遺物（１）



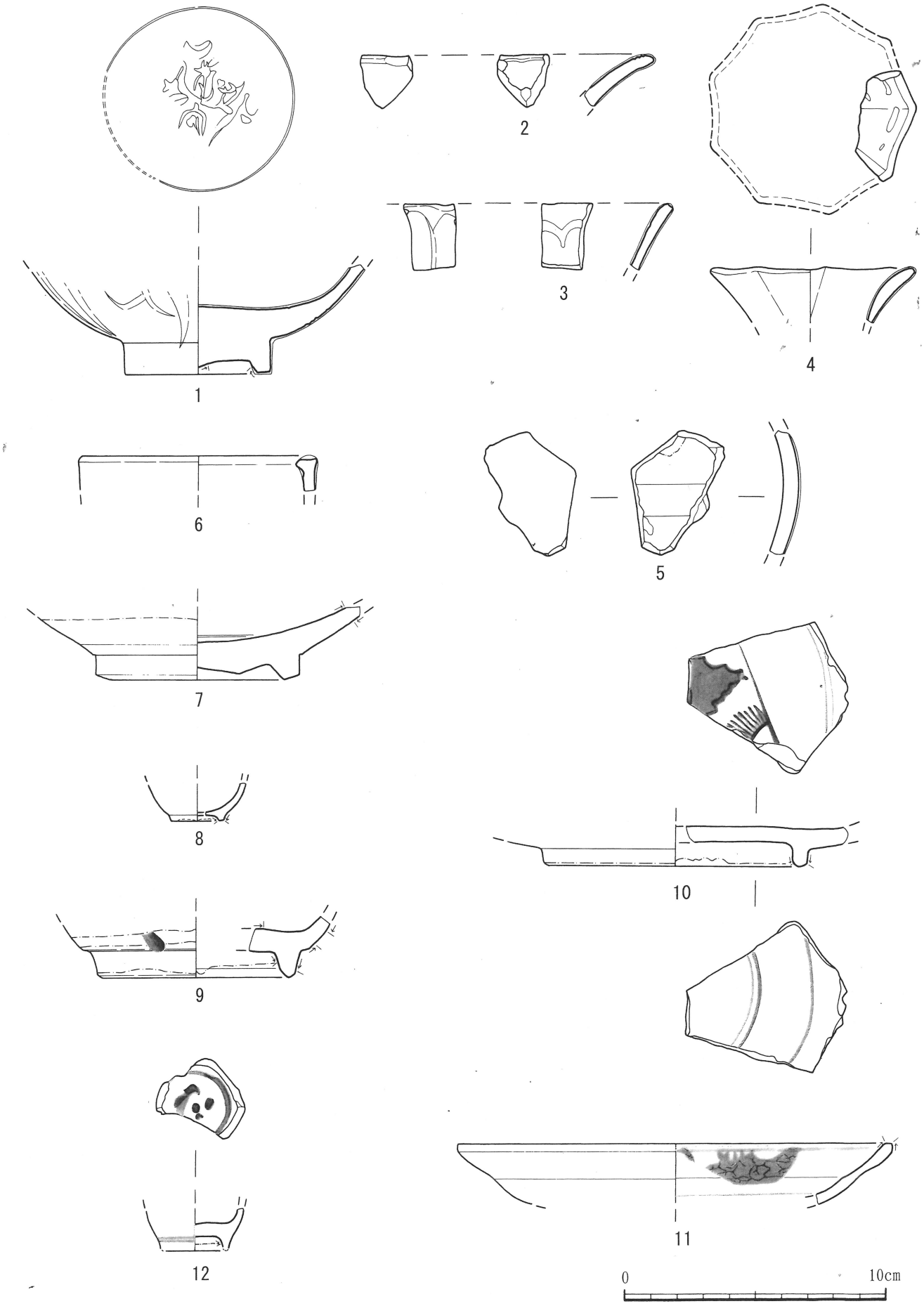
第７図　出土遺物（２）



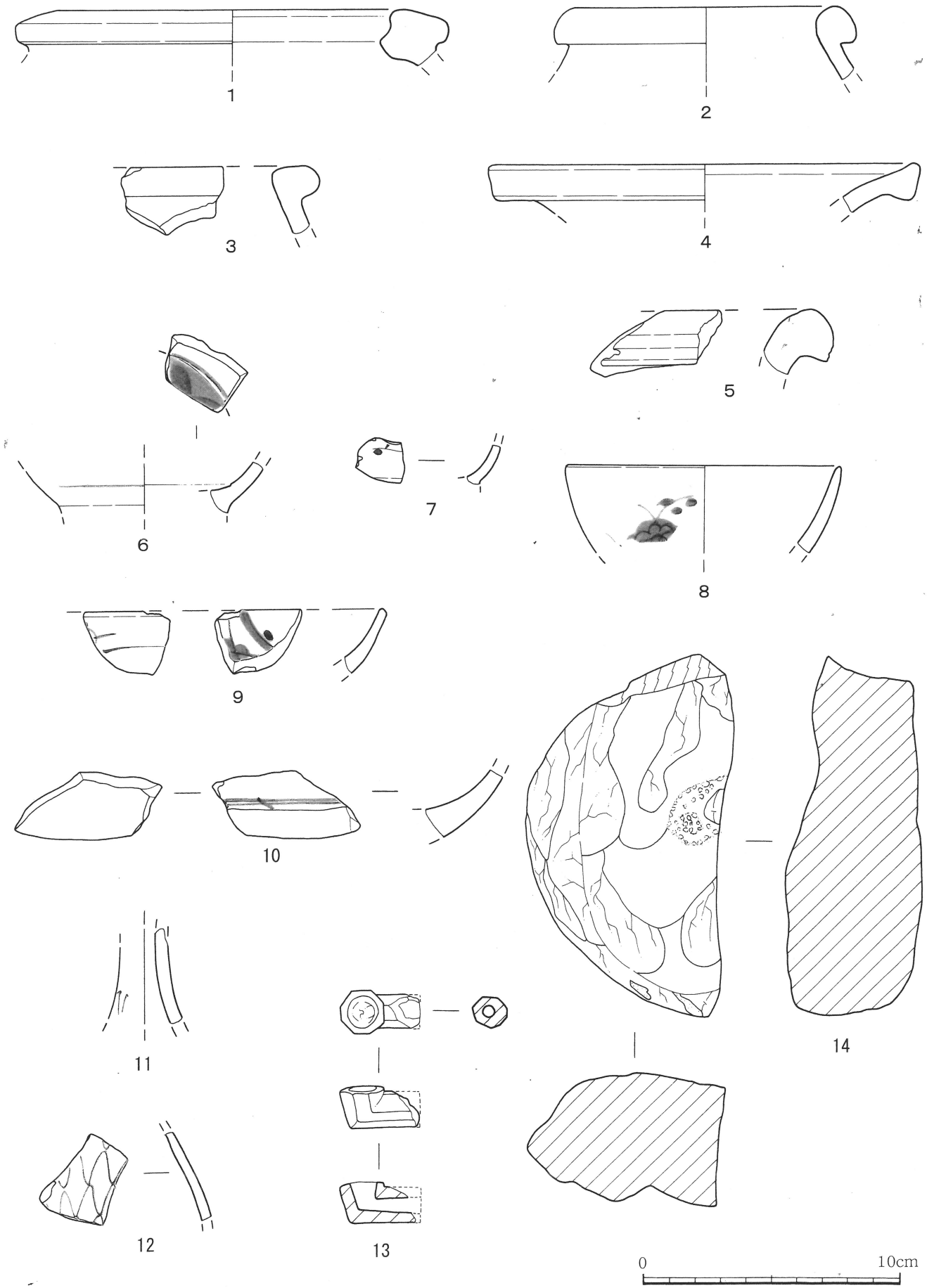
第８図　出土遺物（３）



第９図　出土遺物（４）



第10図　出土遺物（5）



第11図　出土遺物（6）

第５表　出土遺物観察表（１）

図番号		種類	計測値	特　　徴	出土地区
第6図・図版4	1	青磁	口径：11.8cm	直口口縁の連弁文碗。素地は白色、釉は緑灰色。	TP3
	2		－	直口口縁の細刻連弁文。素地は灰白色、釉はオリーブ灰色。	TP3
	3		－	直口口縁の雷文帯碗。素地は白色、釉は明緑灰色。	TP3
	4		口径：11.0cm	外反口縁碗。外面に不明の沈線。素地は灰白色、釉は緑灰色。	TP3
	5		口径：13.6cm	直口口縁の無文碗。素地は灰白色、釉は明緑灰色。	TP3
	6		－	外反口縁の無文碗。素地は白色、釉は緑灰色。	TP3
	7		底径：6.4cm	碗の底部。外面に不明の沈線、連弁か。畳付をわずかに削る。外底面は釉剥ぎ。素地は灰白色、釉は緑灰色。	TP15
	8		底径：5.9cm	碗の底部。外面に不明の沈線、内面に印花文。畳付をわずかに削る。素地は灰白色、釉は緑灰色。	TP3
	9		底径：5.0cm	碗の底部。内面に印花文。素地は灰色、釉の発色は不良でオリーブ灰色。	TP3：２層
	10		底径：6.8cm	碗の底部。内底面を蛇の目釉剥ぎ。畳付を斜めに削る。素地は橙色、釉は緑灰色。	TP15
	11		－	小壺の口縁部。口唇部は露胎。素地は灰白色、釉は緑灰色。	TP3
	12		－	水滴もしくは水注。外面に陰刻。素地は灰白色、釉は緑灰色。	TP3
	13	白磁	－	輪花皿の口縁部。素地は灰白色、釉は緑灰色。	TP15：２層
	14	染付	底径：5.0cm	碗の底部。内底面に芭蕉文。素地は灰白色。	TP15
	15		－	皿？の底部。内底面に桃もしくはザクロと思われる文様。素地は白色。	TP3
第7図・図版5	1	褐釉陶器	口径：10.6cm	壺の口縁部。肥厚部を丸形に形成。素地は灰色、釉はオリーブ灰色。	TP15：２層
	2		－	壺もしくは甕の口縁部。肥厚部を丸形に形成。素地は灰色、釉は黒褐色。	TP13
	3		底径：10.2cm	底部からやや緩やかに立ち上がる。素地はにぶい橙色。露胎。	TP15
	4		底径：13.6cm	底部からやや緩やかに立ち上がる。わずかに轆轤痕が残る。素地は灰色。内面はポーラス。	TP3
	5		底径：17.0cm	底部からやや緩やかに立ち上がる。轆轤痕が明瞭。底面を強く押し上げる。	TP3：２層
	6		底径：16.2cm	底部から直に立ち上がる。外面は轆轤痕が明瞭。素地は灰色、釉は黒褐色。	TP15
	7		－	浮文の龍。素地は灰褐色、釉は褐色。	TP15
	8		－	「吉」字のスタンプ。素地は橙色、釉は掛かっていない。	TP3
	9		口径：23.0cm	鉢もしくは擂り鉢の口縁部。口縁はＬ字をなす。素地は灰色、釉は灰オリーブ色。	TP3
	10		底径：2.4cm	茶壺の底部。外底面に糸切り痕。素地は褐色、釉は黒褐色。	TP3
	11		－	筒状の器形であるが、器種不明。内面にも一部釉が掛かる。素地は灰色、釉は暗褐色。	TP3：２層
	12		－	タイ産もしくは中国産の頸部。素地はにぶい褐色、釉は黒褐色。	TP15
	13		－	タイ産の把手。素地はにぶい橙色、釉は黒褐色。	TP15
第8図・図版6	1	土器	－	Ⅰ類。鉢の口縁部。口唇部は舌状で弱く外反する。混和材に微細粒をわずかに含む。比較的堅緻。	TP15：２層
	2		－	Ⅱ類。鍋の口縁部。口唇部は舌状で直口口縁をなす。混和材に粗い褐色粒を含む。内外ともナデ。	TP3：２層
	3		口径：22.4cm	Ⅱ類。鍋の口縁部。口唇部は舌状で直口口縁をなす。外耳を貼付する。混和材に粗い褐色粒を含む。内外ともナデ。	TP3：２層
	4		－	Ⅱ類。鍋の口縁部。口唇部は舌状で、外に開く器形。混和材に褐色粒をわずかに含む。内外ともナデ。	TP3：１層
	5		口径：13.2cm	Ⅱ類。壺の口縁部。口唇部は平坦で強く外反する。混和材に粗い褐色粒をわずかに含む。内外ともナデ。	TP3
	6		－	Ⅱ類。碗もしくは鉢。口唇部は舌状で直口口縁。混和材に白色粒を多く含む。内面はナデ。	TP3
	7		－	Ⅰ類。底部。混和材に微細鉱物粒を含む。	TP15：２層
	8		底径：15.2cm	Ⅱ類。底部。底部からややきつく立ち上がる。混和材に白色粒をわずかに含む。	TP3
	9		－	Ⅲ類。底部。底部から直に立ち上がる。混和材に白色粒を多く含む。堅緻。	TP3：１層

図番号		種類	計測値	特　　徴	出土地区
第9図・図版7	1	石器	重さ：992ｇ	いびつな方形をなす凹石。４面に敲打による凹面。１面は強く窪み、使用頻度が高いといえる。砂岩。	TP3
	2		重さ：528ｇ	扁平な巴旦杏形をなす砥石。１面は平坦面で、ここを用いている。研ぎによる溝が複数残る。砂岩。	TP15：２層

第６表　出土遺物観察表（２）

図番号		種類	計測値	特　　徴	出土地区
第10図・図版8	1	青磁	底径：5.6cm	碗の底部。外面に不明の沈線、内底面に印花文。素地は灰色、釉は緑灰色。	2697-2番地
	2		－	輪花皿。文様はみられない。素地は灰白色、釉は緑灰色。	2407-1番地
	3		－	口唇を輪花にする。碗と思われる。内外に細刻連弁。素地は灰白色、釉は緑灰色。	2916～18・20番地TP6
	4		－	角杯の口縁部。内面に不明の文様。素地は白色、釉は明緑灰色。	2492番地
	5		－	瓶の胴部。文様はみられない。内面にわずかに轆轤痕が残る。	2475～79・92番地
	6		口径：9.0cm	香炉の口縁部。口唇部は内面にＬ字に張り出す。素地は灰白色、釉は明緑灰色。	2399番地
	7	白磁	底径：6.6cm	碗の底部。ビロースクタイプに含まれるものと思われる。素地は灰色、釉は明オリーブ灰色。	2544番地
	8		底径：2.0cm	小杯の底部。型作り形成。素地、釉とも白色。	2371番地 B-2
	9	染付	底径：7.4cm	福建・広東系碗の底部。内底面は蛇の目釉剥ぎか。外面にわずかに文様。素地は黄白色で呉須の発色は悪い。	2510番地 J-8：２層
	10		底径：9.9cm	皿の底部。大皿と思われる。内底面に圏線と不明の文様。素地は白色。	2407-1番地
	11		口径16.4cm	鍔状口縁の皿もしくは盤。内面に不明の文様、呉須の発色は悪く滲んでいる。	2510番地
	12		底径：2.4cm	小杯の底部。高台脇に圏線、内底面に圏線と点描。素地は白色。	2371番地 B-2：２層
第11図・図版9	1	褐釉陶器	口径：16.6cm	壺の口縁部。肥厚部を方形に形成。素地は黄灰色、釉はオリーブ褐色。	2916～18・20番地TP13
	2		口径：11.6cm	中国産。丸形の肥厚口縁。素地はオリーブ褐色、釉は黒褐色。	2435・2436-1・2番地TP2
	3		－	中国産。Ｌ字の口縁。素地は黄橙色、釉はオリーブ黒色。	2435・2436-1・2番地TP2
	4		口径：16.6cm	タイ産の口縁部。口唇部が三角形に肥厚し、ラッパ状に開くタイプ。素地は灰色、釉は黒褐色。	不明
	5		－	タイ産の口縁部。口唇部が丸く肥厚し、あまり開かないタイプ。素地は灰色、釉は剥落して不明。	2916～18・20番地TP13
	6	色絵	－	碗の底部。文様は不明。内底面を釉剥ぎ。素地は白色。	2411～14番地
	7		－	小杯の底部。文様は不明。素地は白色。	2510番地 J-8：表土
	8	本土産磁器	口径：10.6cm	碗の口縁部。外面に花文。素地は灰白色。	2360番地
	9		－	碗もしくは皿の口縁部。内外に不明の文様。素地は灰白色。	2510番地
	10		－	碗の胴下半部。内面に不明の文様および圏線。全体的に白濁している。素地は灰白色。	2510番地
	11		－	瓶の頸部。直線的な網目文を施す。素地は白色。	2510番地
	12		－	瓶の肩部。曲線的な網目文を施す。器厚は薄手。素地は白色。	2429・2455番地
	13	キセル	－	陶製キセルの雁首。断面形は八角形。接続部が破損する。	ナウンニウガン
	14	石器	重さ：665ｇ	砥石と思われる。１面に磨面を有するがはっきりしない。砂岩を利用している。	2371番地 B-2

第４章　総括

以上、島仲村跡遺跡における調査の成果を報告した。最後に今回の調査成果の総括を述べる。

今回の調査は遺跡全体の範囲確認調査として実施したが、いずれの試掘地点ともに耕作や採石などにより遺跡の保存状況は悪い。中には採石後に埋め戻しを行った地点もあり、これらの部分については隠滅の状態であった。

地点によっては遺物が全く採集できない場所もあった。また、遺物の採集量も地点によってばらつきが大きく、いくつかの地点では遺物が多く散布していた。地区内はこれのような地点が散在する形で遺跡が形成されていると考えられる。この点は沖縄県立博物館による調査を再確認できたといえる。

試掘調査の結果、２ヶ所の試掘坑において遺物包含層および遺構を確認した（実際は一連の遺構である）。確認した遺構は溝状遺構で、与那原遺跡で確認した遺構と同様な排水機能を持っていたと考えられる。

また、地区内には多くのウガンなどがあり、石積みなどが遺存している場所もある。特にウヤバルウガン、ンマナガマイントゥニ一帯は島仲村の旧情を残していると考えられ、近世の与那国における集落の在り方を考える上で貴重である。

その他に墓や墓と思われる集石があり、これまで確認されている墓の形態から考えて積石墓と思われる。今回の調査では位置の確認のみに止まった。沖縄本島においては近世に属する墓の調査がすすめられていることから、これらの墓についても慎重な取扱が必要である。

遺物は包含層を確認した地点からまとまって得られた。土器がもっとも多く、その他に青磁、褐釉陶器が得られた。青磁の水滴もしくは水注、褐釉陶器には龍文を施したと思われるタイプ、「吉」字のスタンプを施すものがあり、特徴的な遺物がみられる。これに対して染付は極めて少なく、白磁、沖縄産陶器がほとんどみられない点は特筆すべきである。また、タイ産褐釉陶器は当該地域のみからの出土・採集である。その他の採集遺物として青磁では八角杯や香炉、瑠璃釉、緑釉陶器などがある。

遺物の出土・採集量が、白磁・染付は少なく、土器・中国産褐釉陶器が卓越するという点は与那原遺跡、慶田崎遺跡でも確認されており、かつ青磁、中国産褐釉陶器の傾向が類する。また、石器は少なかったが与那原遺跡とに近い石器組成であった。これらの点から、島仲村跡遺跡と与那原・慶田崎遺跡が並行して存在した時期があったと考えられる。

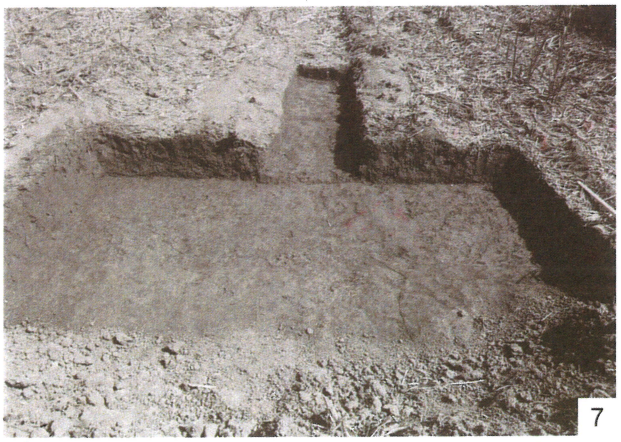
今回の調査対象地は、耕作地および牧場として利用されていることから試掘調査を行うことができた地点は限られたものとなった。また、調査が可能な地点を優先したため、保存状態が良好であると考えられるウガン内の遺構や墓については十分な調査が行うことができなかった。

島仲村跡遺跡一帯は、現在でも祭祀の対象となっており、町民から崇敬を集める場所である。工事計画にあたってはこれらの地域の取り扱いには十分な配慮が必要と思われる。

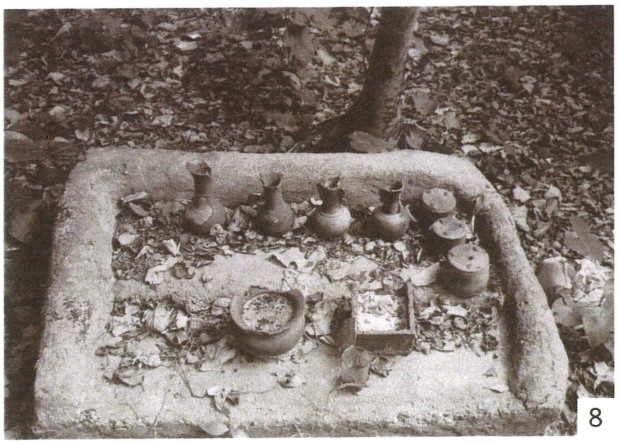
引用・参考文献

池間　栄三
　1959『与那国の歴史』
上原　　静
　1986「グスク時代遺跡出土の匙」『文化課紀要』3　沖縄県教育庁文化課
沖縄県教委
　1980『竹富町・与那国町の遺跡』　同発行
　1985『トゥグル浜遺跡』　同発行
　1986『下田原貝塚・大泊浜遺跡』　同発行
　1990『沖縄県歴史の道調査報告書－八重山諸島の道－』　同発行
　1993『琉球国絵図史料集－元禄国絵図及び関連資料－』　同発行
　2000『空港整備予定地周辺の遺跡』　同発行
沖縄大学学生文化協会
　1971『郷土』10　同発行
木下　尚子
　1986「貝製容器小考」『南島考古』7　沖縄考古学会
坂井　　卓
　1985「与那国島」『琉球弧の地質誌』　沖縄タイムス社
笹森儀助
　1895『南嶋探験』
城間肇・西銘章・譜久嶺忠彦
　2001「カンジン地区発掘調査の概要」『南島考古だより』66　沖縄考古学会
多和田真淳
　1960「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」『文化財要覧』1960年版　琉球政府文化財保護委員会
知念　　勇
　1989「与那国島の遺跡」『県立博物館総合調査報告書』Ⅵ　沖縄県立博物館
永井昌文・佐野一
　1966「琉球・与那国島の人骨について（予報）」『日本人類学会・日本民族学協会連合大会第19回紀事』　日本人類学会・日本民族学協会連合大会
与那国町教委
　1986『慶田崎遺跡』　同発行
　1988『与那原遺跡』　同発行
　1995『与那国島の植物』　同発行

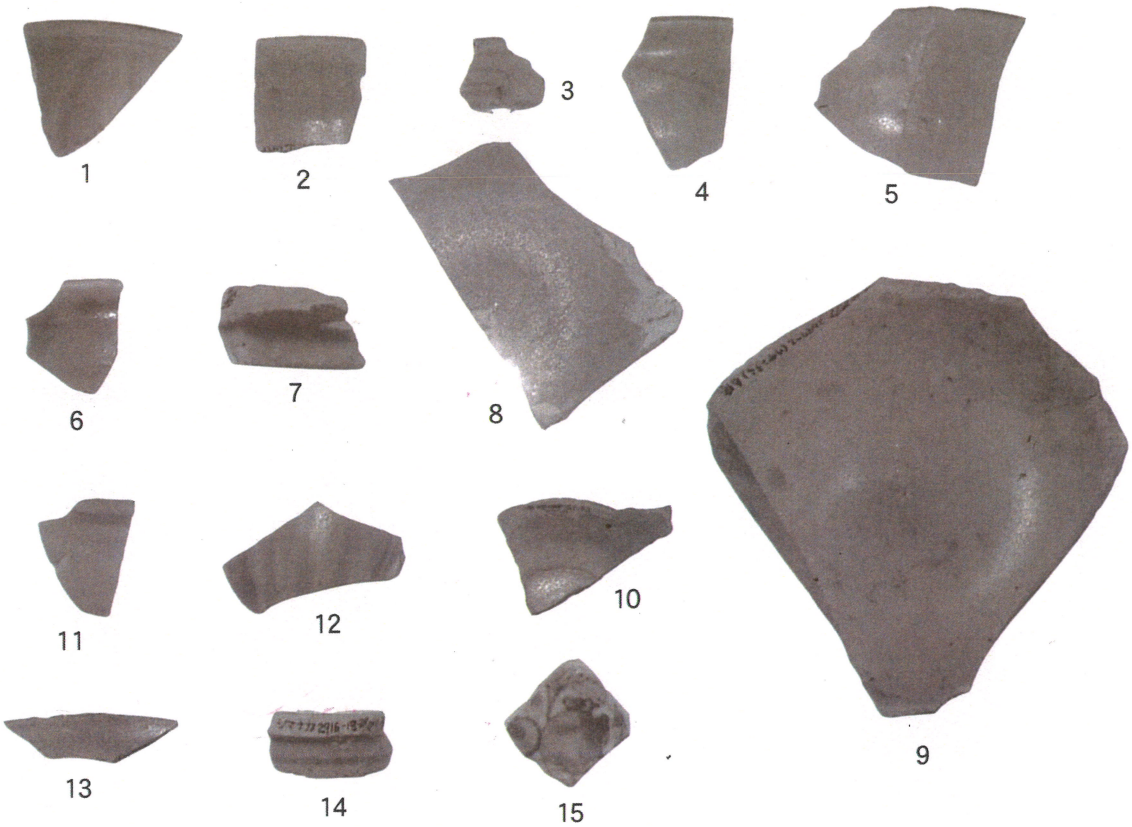
図　版

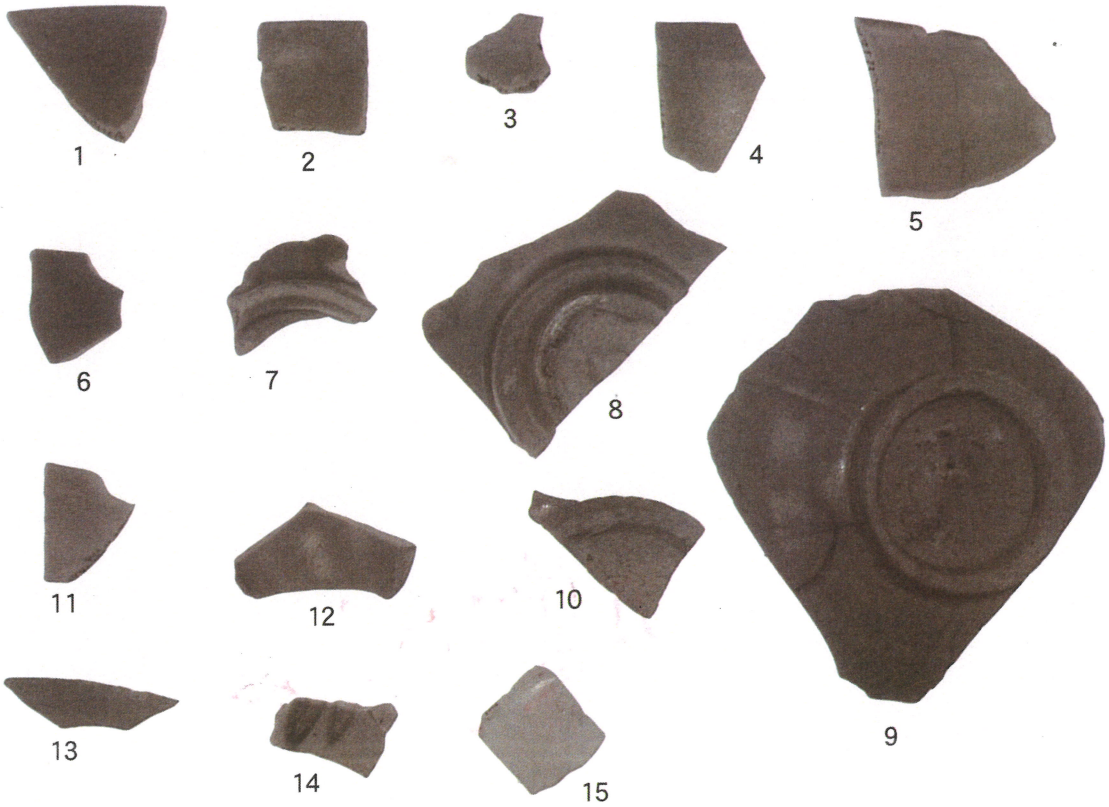


図版２　調査状況（1）　１～５　調査地　６、調査状況　７・８　TP3

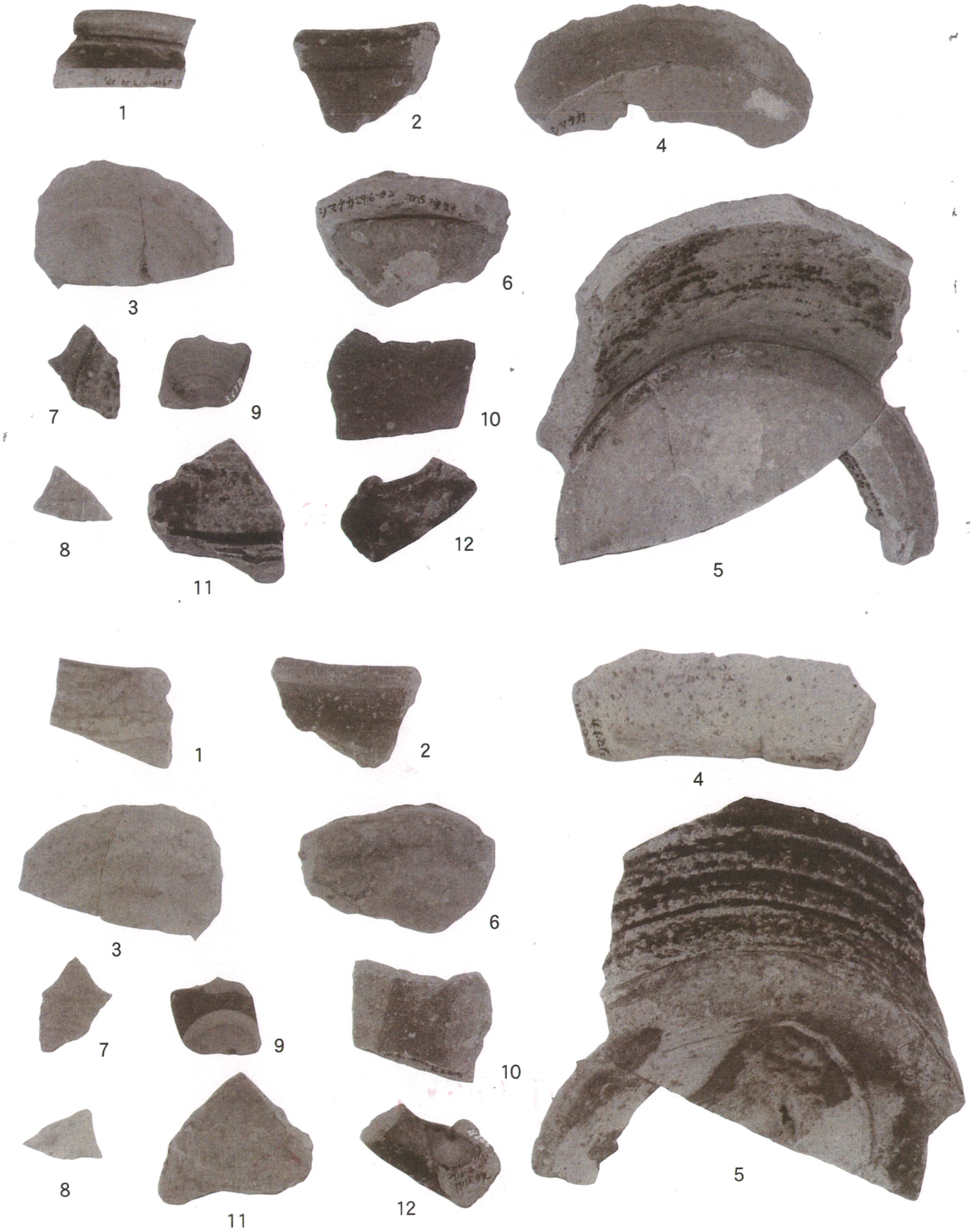


図版３　調査状況（2）　1・2、TP3　3～5、TP15　6、焼土　7、地区内の古墓　8、アラガウガン

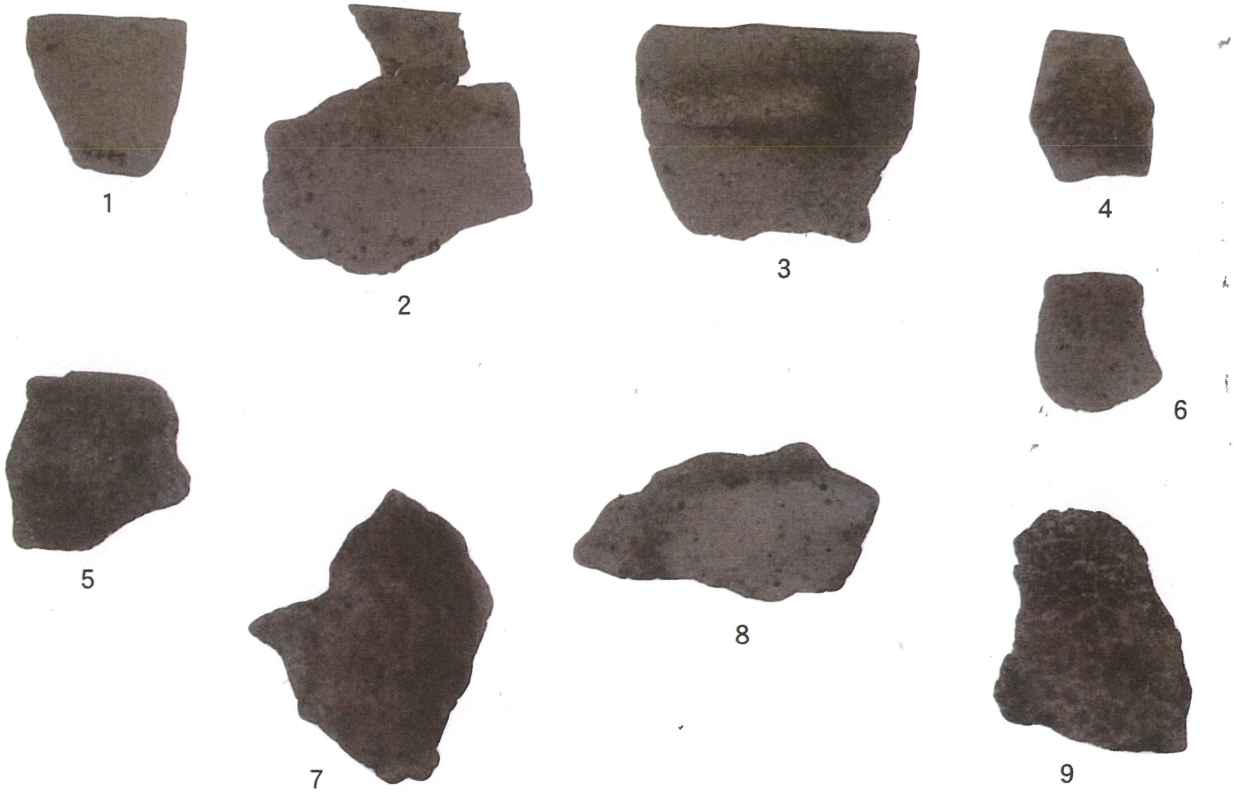


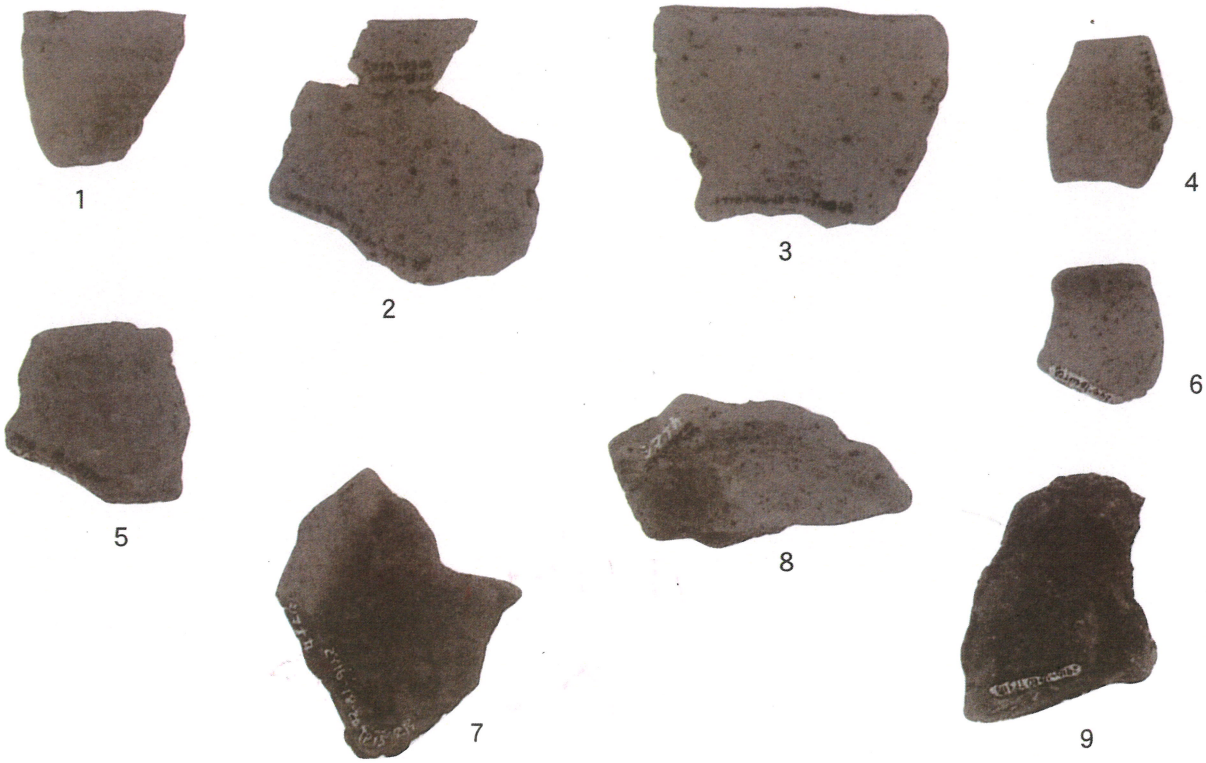


図版４　出土遺物（2）



図版５　出土遺物（3）





図版６　出土遺物（4）

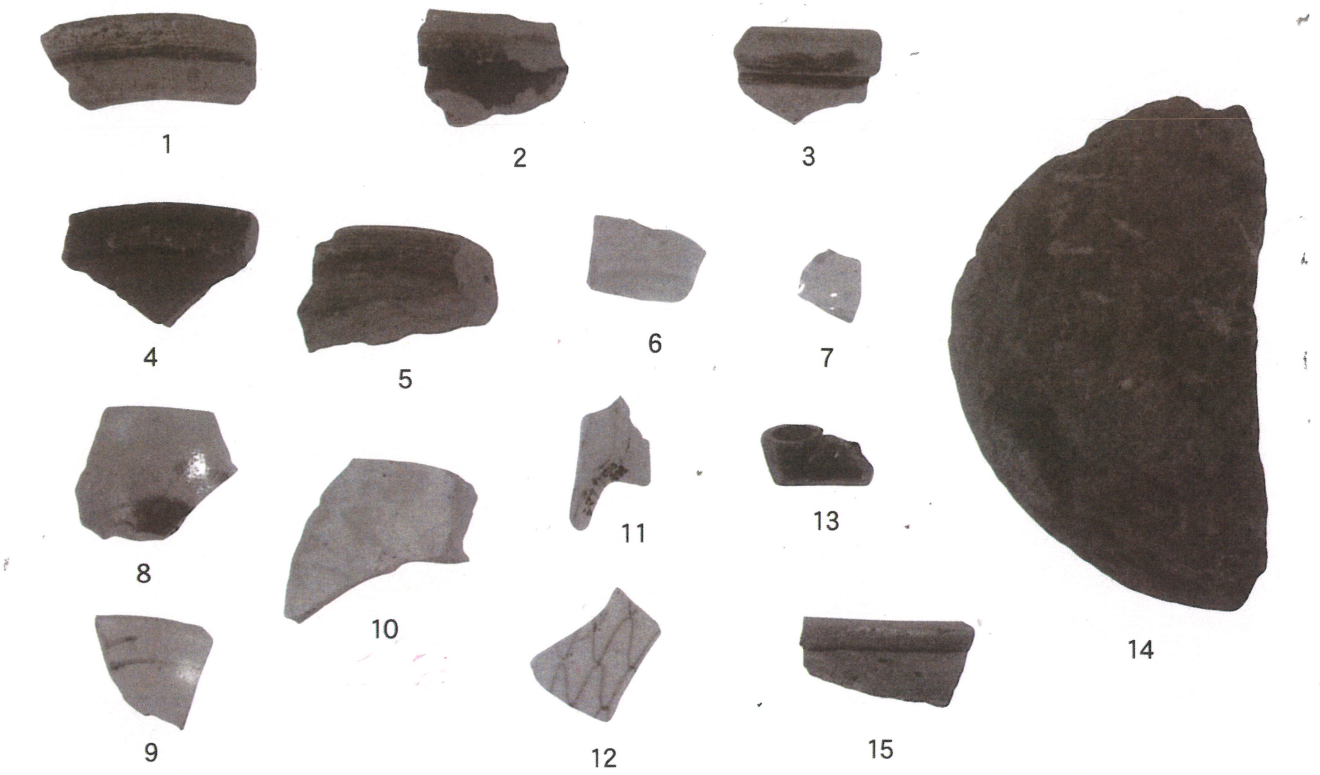
1

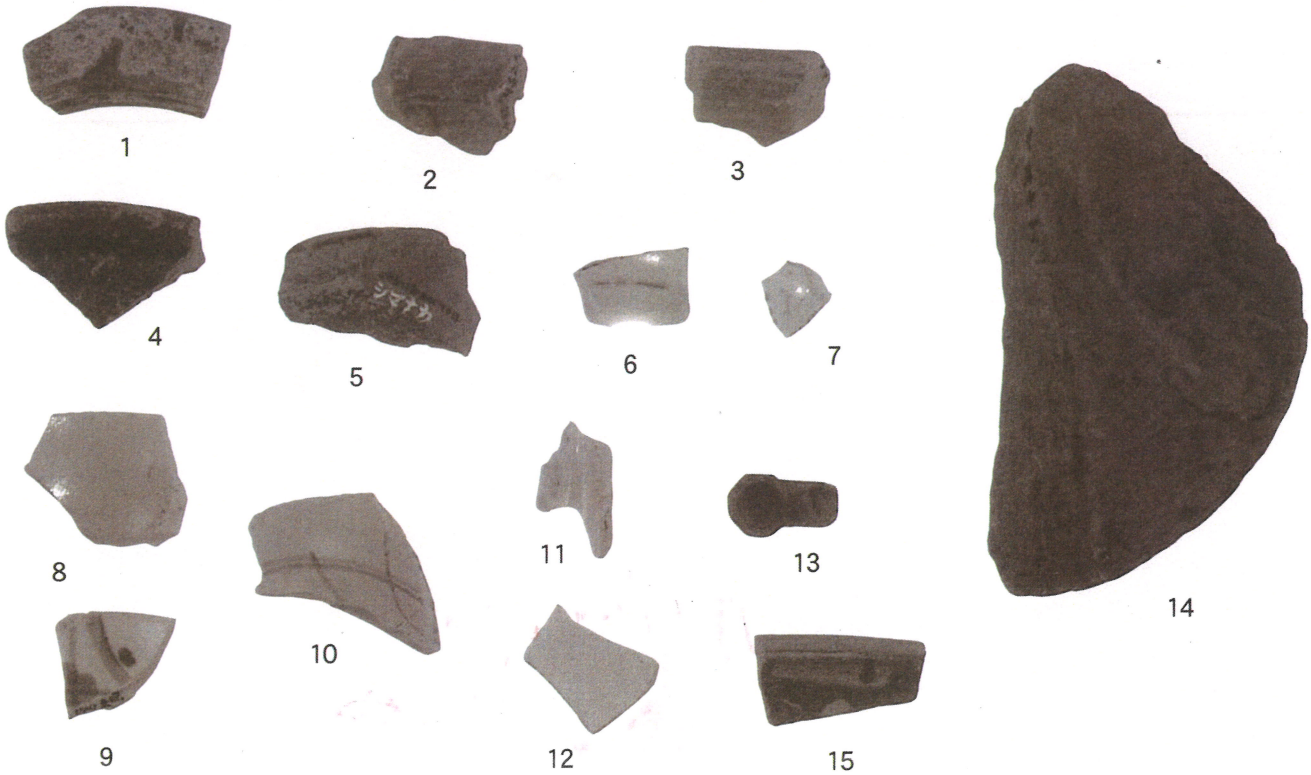
2

1

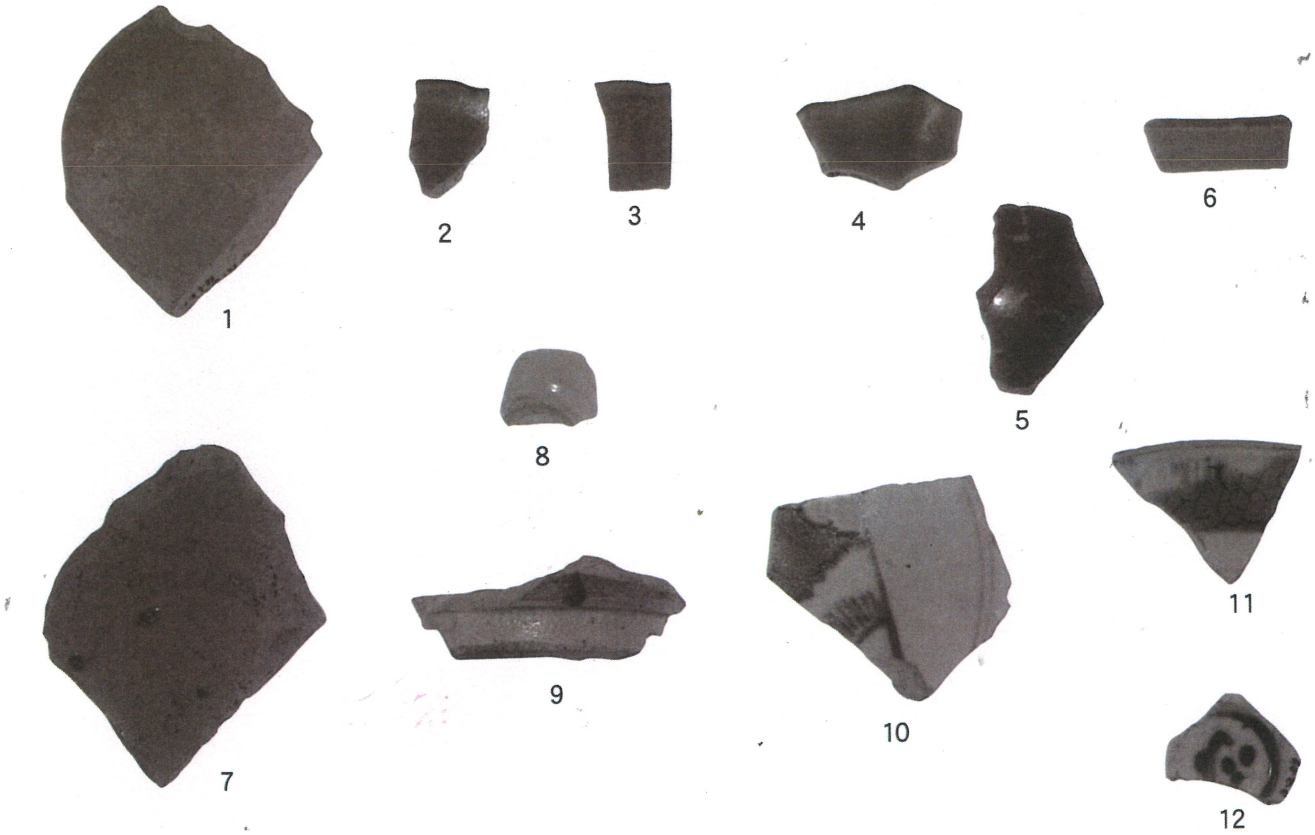
2

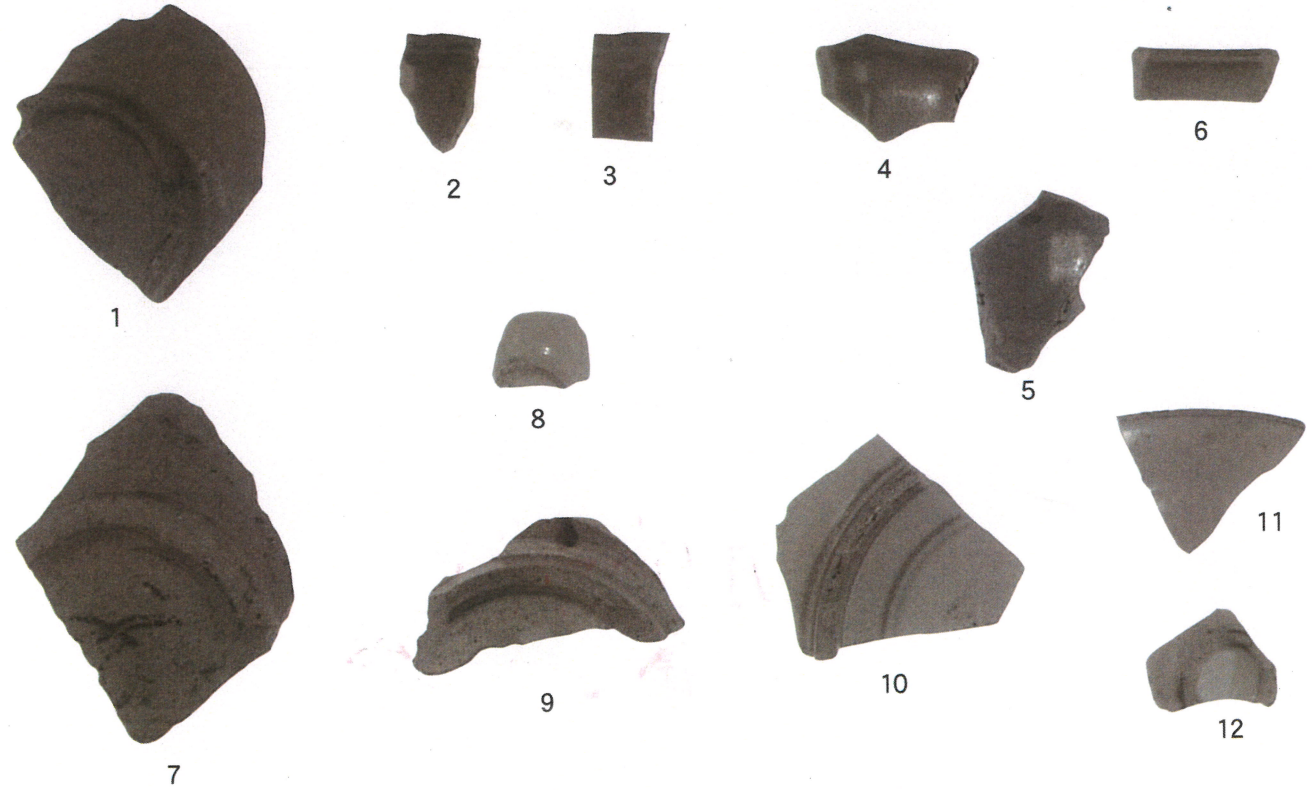
図版７　出土遺物（5）





図版８　出土遺物（6）





図版９　出土遺物（7）

例　　言

1　今回の報告は、平成11年度～平成13年度にかけて、文化庁および沖縄県から補助を得て実施した「島仲地区遺跡詳細分布調査」に係るものである。

2　調査は与那国町教育委員会が主体となり、沖縄県教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センターからの指導を受けて実施した。

3　今回の報告で用いた地図等は、与那国町役場調整のものを用いた。

4　原稿の執筆は西銘が行った。また、編集は又吉純子、平良貴子、久保田由美（県立埋蔵文化財センター）らの協力を得て行った。

5　調査の実施にあたっては下記の方々からのご指導を得た。

池間　苗　　与那国町文化財保護審議委員長
安里嗣淳　　（財）沖縄県文化振興会史料編集室長
土肥直美　　琉球大学医学部助教授

6　遺物へのナンバリングは「シマナカ　2345　TP１」などとした。算用数字が地番、TPが試掘坑の通し番号である。

報告書抄録

ふりがな	しまなかむらあといせき
書名	島仲村跡遺跡
副書名	島仲地区遺跡詳細分布調査に係る調査報告書
巻次	与那国町文化財調査報告書第３集
シリーズ名	
編著者名	西銘　章
発行機関	与那国町教育委員会
所在地	〒907-1801　沖縄県八重山郡与那国町字与那国129番地
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
島仲村跡遺跡（しまなかむらあといせき）	沖縄県八重山郡（おきなわけんやえやまぐん） 与那国町字与那国（よなぐにちょうあざよなぐに） 島仲（しまなか）・野底（のそこ）	47382 与那国町		24° 27′ 9″	122° 59′ 37″	1999年 ～ 2001年		土地改良にかかる事前の分布調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島仲村跡遺跡	包蔵地	近世	墓 溝状遺構 焼土集中部	青磁、白磁、染付、瑠璃釉、色絵、彩釉陶器、中国産・タイ産褐釉陶器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、キセル、金属製品、貝類、獣骨	近世の溝状遺構を確認した。

与那国町文化財調査報告書　第３集

島　仲　村　跡　遺　跡

—島仲地区遺跡詳細分布調査に係る調査報告書—

発　行　年　　平成14（2002）年３月29日
発行・編集　　与那国町教育委員会
〒907－1801　沖縄県八重山郡与那国町与那国129番地
Tel　09808－7－2002
印　　刷　　株式会社アシスト
〒901－1111　沖縄県島尻郡南風原町字兼城577番地
Tel　098－889－6100（代表）